新潟県埋蔵文化財調査報告書　第145集

一般国道113号
荒川道路関係発掘調査報告書Ⅰ

道　端　遺　跡　Ⅳ

２００５

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道113号

荒川道路関係発掘調査報告書Ⅰ

道端（みちばた）遺跡Ⅳ

２００５

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

新潟山形南部連絡道路（新潟県岩船郡荒川町～山形県東置賜郡高畠町間延長約80km）は、日本海東北自動車道、東北中央自動車道等の高規格幹線道路を補完し、物資の流通、人の交流の活発化を促し、村上地方生活圏と米沢市を中心とする米沢地域集積圏の交流を図る道路として平成６年に地域高規格道路の計画路線として指定されました。この一部である荒川道路は、日本海東北自動車道荒川インターチェンジ（仮称）と一般国道７号をアクセスするために計画された道路です。

本書はこの道路建設に先立ち発掘調査を行った「道端遺跡Ⅳ」の調査報告書です。調査の結果、縄文時代晩期の遺物を中心として、ほかに古墳時代、平安時代の遺物が出土しました。また、縄文土器が集中して出土した地点からは、火を焚いた痕跡のある土坑も検出されました。この結果、平成14年度の調査で明らかになった縄文後・晩期遺跡の範囲がさらに広がることを示すこととなりました。

阿賀野川以北の沖積地における縄文時代遺跡の発見は、加治川村青田遺跡を代表に、近年急速に増大しつつあります。今回の道端遺跡の調査により更に重要な資料を付け加えることができたと言えるでしょう。この調査報告書が、縄文時代をはじめとする考古学研究に資すると共に、地域の歴史を学ぼうとする多くの方々に活用されることを願っております。

最後に、この調査に参加された地元住民の方々並びに荒川町教育委員会には多大なる御協力と御援助を頂きました。また、国土交通省北陸地方整備局羽越河川国道事務所には調査に際して格別の御配慮を頂きました。ここに厚く御礼を申し上げます。

平成17年３月

新潟県教育委員会

教育長　板屋越　麟一

例　　言

1　本報告書は、新潟県岩船郡荒川町大字南新保字蟹田地内に所在する道端遺跡Ⅳの発掘調査記録である。発掘調査は新潟山形南部連絡道路「荒川道路」の建設に伴い、新潟県教育委員会（以下、県教委とする）が国土交通省から受託して実施した。

2　発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団とする）に調査を依頼し、平成16年7月から9月に実施した。発掘調査面積は、3,450m^{2}である。

3　航空写真の撮影は（株）イビソクに委託した。

4　整理及び報告に係る作業は、平成16年11月から平成17年3月にかけて埋文事業団が行った。

5　出土遺物及び記録類は、県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記記号は、遺跡名の前に調査年度及び事業名を付し、「04クニミチ」とした。また出土地点及び層位を併記した。

6　引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中で［　］で示し、巻末に掲載した。

7　既成の地図・図版を用いた場合は、その出典を記した。

8　本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文、図面図版、写真図版の番号は一致している。

9　本書で示す方位は、すべて真北である。ただし、ここでいう「真北」とは、日本平面国家座標のＸ軸方向を示す。

10　本書は、田海義正（埋文事業団調査課　課長代理）の指導のもとに渡邊裕之（同　調査班長）が全体を担当し、遺物実測・トレース・図版作成・写真撮影などは埋文事業団職員が行った。なお、墨書土器の判読にあたっては、田中一穂（埋文事業団嘱託）の協力を得た。

11　第Ⅵ章は、（株）パレオ・ラボに委託した。

12　本書は渡邊裕之、辻　範朗（埋文事業団調査課　主任調査員）が分担執筆したもので、執筆分担は以下の通りである。編集は渡邊裕之が行った。

第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章・・・辻・渡邊

第Ⅴ章、第Ⅶ章・・・渡邊

13　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くの御教示・御協力を頂いた。ここに記し厚く御礼申し上げる。（五十音順、敬称略）

阿部　朝衛　　阿部　博志　　石川日出志　　勝山　百合　　小林　圭一　　高濱　信行　　田辺　早苗
手塚　　均　　山田　晃弘　　吉井　雅勇　　荒川町教育委員会

目　　次

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査と整理作業 …… 2

A　試掘確認調査 …… 2

B　本発掘調査 …… 3

C　調査・整理の体制 …… 4

第Ⅱ章　遺跡の立地と周辺の遺跡

1　縄 文 時 代 …… 5

2　古 墳 時 代 …… 5

3　古　　代 …… 5

第Ⅲ章　グリッドの設定と層序

1　グリッドの設定 …… 8

2　層　　序 …… 8

第Ⅳ章　遺　　構

1　縄文時代の遺構 …… 10

A　遺物集中ブロック …… 10

B　SK001 …… 10

C　SX008 …… 12

D　SX010 …… 12

2　古墳時代の遺構 …… 13

A　SX003・004・009 …… 13

3　古代以降の遺構 …… 14

A　SX002 …… 14

B　SX005 …… 14

C　SX006 …… 14

D　SX007 …… 15

第Ⅴ章　遺　　物

1　縄文時代晩期の遺物 …… 16

A　遺物集中ブロック …… 16

B　SX008 …… 18

C　SK001 …… 18

D　遺　構　外 …… 18

2　弥生時代中期の遺物 …… 19

3　古墳時代前期の遺物 …… 19
A　SX004 …… 19
B　SX005・遺構外 …… 20
4　平安時代以降の遺物 …… 20
A　SX005 …… 20
B　SX002 …… 21
C　遺　構　外 …… 21

第Ⅵ章　自然科学分析

1　道端遺跡出土骨片の同定 …… 22
2　SK001出土炭化材の樹種同定 …… 24
3　道端遺跡から出土した炭化種実 …… 25

第Ⅶ章　ま　と　め

1　縄文晩期前葉の土器 …… 27
2　道端遺跡の性格と遺跡群 …… 28
≪要　　約≫ …… 30
≪引 用 文 献≫ …… 30
≪観　察　表≫ …… 31

挿 図 目 次

第 1 図　遺跡の位置 …… 1
第 2 図　既往調査区位置図 …… 2
第 3 図　試掘調査トレンチ位置図 …… 3
第 4 図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 7
第 5 図　基本層序模式図 …… 8
第 6 図　グリッド配置と地形測量図 …… 9
第 7 図　遺物集中ブロック …… 11
第 8 図　遺構出土動物遺体写真 …… 22
第 9 図　SK001出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真 …… 24
第10図　出土した炭化種実 …… 26
第11図　平成14年調査区　遺物集中ブロック2 …… 27

表　目　次

第 1 表　周辺の遺跡 …… 6
第 2 表　遺構出土動物遺体 …… 22
第 3 表　炭化材樹種同定結果一覧 …… 24

図 版 目 次

［図面図版］

図版 1　遺構個別図　SK001・SX008
図版 2　遺構個別図　SX010・SX002・SX003・SX004・SX009
図版 3　遺構個別図　SX005・SX006・SX007
図版 4　縄文時代の土器（1）　遺物集中ブロック
図版 5　縄文時代の土器（2）　遺物集中ブロック・SX008・SK001、縄文時代の石器（1）
図版 6　縄文時代の石器（2）
図版 7　古墳時代以降の土器（1）
図版 8　古墳時代以降の土器（2）

［写真図版］

図版 9　SK001セクション・SK001焼土検出状況
図版10　調査風景（1）
図版11　調査風景（2）
図版12　調査風景（3）
図版13　調査風景（4）
図版14　出土遺物（1）
図版15　出土遺物（2）
図版16　出土遺物（3）
図版17　出土遺物（4）
図版18　土器部分拡大

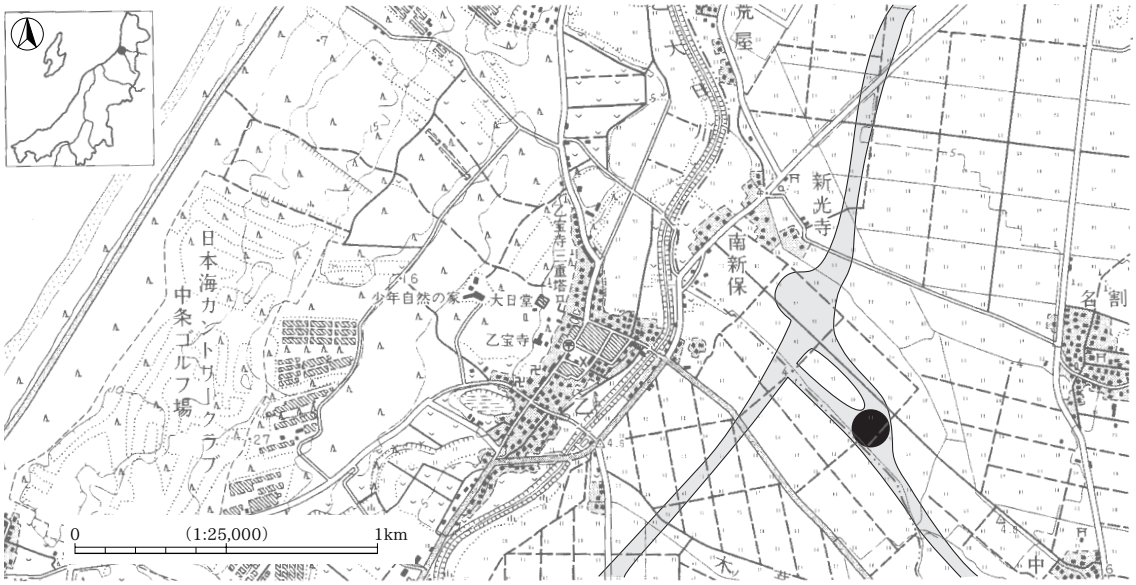
第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

新潟山形南部連絡道路（新潟県岩船郡荒川町～山形県置賜郡高畠町間約80km）は、平成６年に地域高規格道路の計画路線として指定された。新潟県内約30kmのうち、荒川町地内部分約4kmが荒川道路にあたり平成13年度より事業化されている。これを受けて、国土交通省北陸地方整備局と県教委との間で、建設用地内における埋蔵文化財の分布調査・試掘確認調査等に関する協議が本格化した。

道端遺跡は、日本海東北自動車道（以下、日東道）の建設にともなう踏査によって平成11年に発見・周知化され、平成13年と14年には埋文事業団によって本調査が行われている［石川ほか2002・渡邊ほか2003］。荒川道路地内にも遺跡が広がっていることが予測されたため、平成12年に分布調査を行って遺物が表採された。県教委からの委託を受けた埋文事業団は、本線に先立って工事が行なわれる暫々定線（本線予定地の南北両側、幅20～30m、延長2,300mの区間）部分について、平成14年10月と12月の２度にわたり確認調査を実施したが遺構は検出されず、遺物も腐植物層から青磁片１点が出土したのみであった。しかしその後、平成15年３月に本線部分（幅約30m、延長2,300mの区間）の確認調査を実施し、縄文時代後・晩期の遺物を検出したことから、本調査が必要である旨を県教委に報告した。平成16年２月に行われた国土交通省との調整会議で平成16年度に本調査を実施することが決定し、同年４月１日、国土交通省から県教委が受託し、７月20日から埋文事業団が本発掘調査に着手した。

道端遺跡では、日東道と荒川道路の両事業にともない、本報告を含めて６次におよぶ発掘調査が行われている。主体時期や小字名を違えながらも、全て道端遺跡として調査されていることから、混乱を防ぐために既往調査を整理すると次のようになる。各調査地点の位置関係は第２図に示した。



第１図　遺跡の位置

〔原図　国土地理院「坂町」1/25,000〕

①道端遺跡Ⅰ　古墳前期主体　　『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅲ』2002

②道端遺跡Ⅱ　縄文後・晩期主体　『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅳ』2003

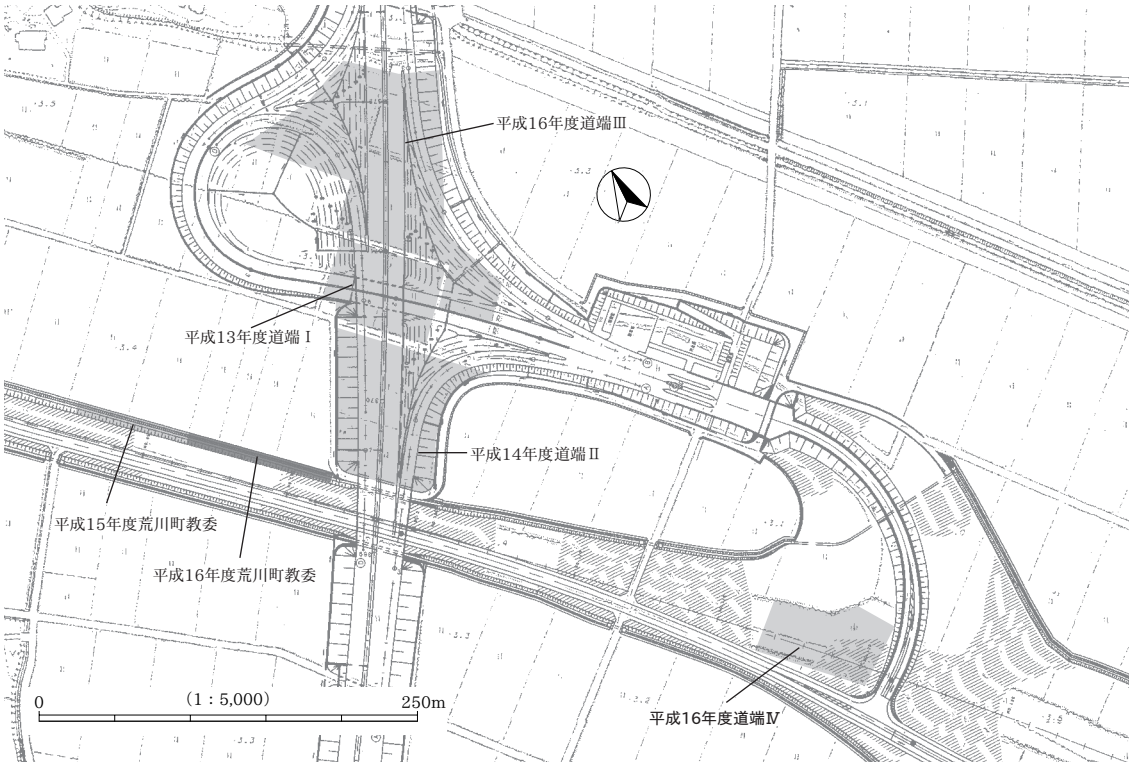
③道端遺跡Ⅲ　古墳前期主体　　『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅶ』2005

④道端遺跡Ⅳ　縄文晩期・古墳前期・古代（**本報告書**）

『一般国道113号荒川道路関係発掘調査報告書』2005

⑤荒川町教育委員会平成15年調査（平成18年報告予定）

⑥荒川町教育委員会平成16年調査（平成18年報告予定）



第２図　既往調査区位置図

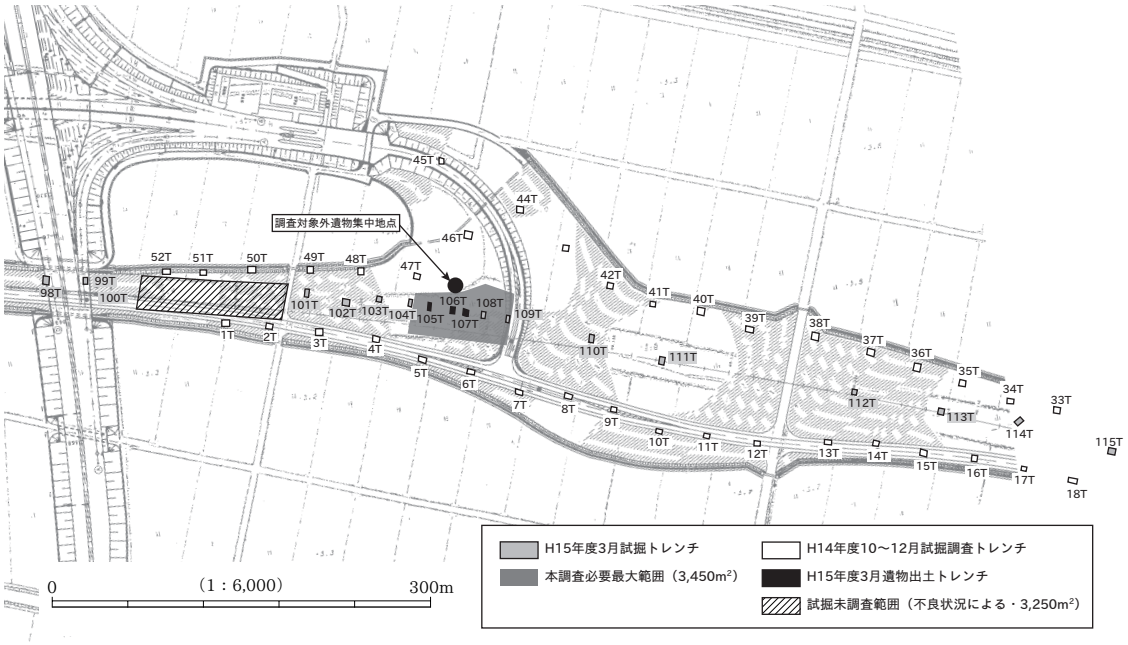
2　調査と整理作業

A　試掘確認調査

試掘確認調査は、平成14年10月15日～10月31日、12月9日～12月13日と平成15年3月10日～3月14日の3次に渡って実施した。平成14年の確認調査は国道113号荒川道路の暫々定線（本線予定地の南北両側、幅約20～30m）部分の140，300m^{2}を調査対象とし、1,117m^2（確認率0.7％）について調査した。平成15年の確認調査は、荒川道路本線部分の69,000m^{2}を調査対象とし、458m^2（確認率0.6％）について調査した。調査は、対象地に任意に確認トレンチを設定し、重機（バックホー）および人力で徐々に掘り下げ、遺構・遺物の有無を精査した。

調査の結果、道端遺跡に係る105～108トレンチにおいて古墳時代後期の土器、性格不明の落ち込み1基や縄文時代後・晩期の遺物、河川跡と思われる土層の堆積が検出された。昭和期のほ場整備により上部が削平されていたため、明確な遺物包含層は確認されなかったが、標高的には微高地状を呈しており、旧地形が部分的に残っているものと思われた。出土した縄文時代の遺物については、古墳時代の遺構を確

認した青灰色砂質シルト中から出土しており、遺物周辺には炭化物の集中が見られるなど、遺物の時期や検出状況に道端遺跡Ⅱとの類似性が認められ、3,450m^{2}について本発掘調査が必要と判断された（第３図）。



第３図　試掘調査トレンチ位置図

B　本発掘調査

平成13年度調査では古墳時代前期と後期の遺構・遺物が出土し、周辺に集落跡の存在が想定された。平成14年度調査では下層から縄文時代の遺物がまとまって出土し、延べ11,000m^2（上層7,000m^2、下層4,000m^2）を調査した。この調査で、これまで古墳時代の遺跡として周知されてきた道端遺跡は縄文時代後期後葉～晩期前葉における低地遺跡として再認識された。

遺跡が低湿な場所に立地するため、調査区の周囲に暗渠を敷設し、電動ポンプで24時間強制排水を実施した。土層観察用のセクションベルトは、通常はグリッドに沿って設定するところだが、グリッド設定の基準となるセンター杭の位置が確認できなかったため、調査区の長・短辺に合わせて３本（調査区東西方向に１本、南北方向に２本）設定した。そのため、セクションベルトとグリッドの軸がずれてしまっている（第６図）。表土除去はバックホーを使用し、調査員の指示により徐々に掘り下げた。メインベルトに沿ってトレンチを設け、断面観察した結果、古墳時代の包含層（Ⅲ層）は殆ど削平されていることが分かった。調査区東側（7D～11Fグリッド）では川跡（いわゆるガツボ）が確認され、調査区西側（6Eグリッド）のトレンチからは縄文土器が多数出土したため、地点によっては縄文時代の包含層（Ⅳ層）が良好に存在していることが予測された。なお、試掘確認調査の結果から、8C～10Cグリッドはガツボで占められていることが判明していたため、バックホーにより遺物の有無を確認して調査を完了した（図版13）。

包含層掘削はジョレンを使って人力で掘り下げたが、場所に応じてホソを使い効率化を図った。平成14年調査の実績から、縄文後・晩期の遺物包含層と遺構確認面の識別に困難を極めることが予測されたため、あらかじめ小グリッドの周囲に土層観察用のベルトを残しながら包含層掘削を行った。その後、遺物や炭化物の出土した小グリッドを中心に深さ40cmのサブトレンチを周囲に設けて、断面観察による遺構の確認に努めた。

C　調査・整理の体制

発掘調査と整理作業は、以下の期日と体制で行った。

調 査 期 間	平成16年7月20日～9月28日
整 理 期 間	平成16年11月25日～平成17年3月31日
調査・整理主体	新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）
調査・整理	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	黒井　幸一（事務局長）
管　　理	長谷川二三夫（総務課長）
庶　　務	高野　正司（総務課主任）
調査・整理総括	藤巻　正信（調査課長）
調査・整理指導	田海　義正（調査課課長代理）
調査・整理職員	渡邊　裕之（調査課主任調査員）
	辻　　範朗（調査課主任調査員）
整 理 職 員	小熊　洋子（調査課嘱託員）
	木山　京子（調査課嘱託員）
	島倉はるみ（調査課嘱託員）

第Ⅱ章　遺跡の立地と周辺の遺跡

1　縄文時代

荒川町の縄文時代の遺跡は、道端遺跡を含めて現在までに19遺跡が確認されている。平野部には古町遺跡、名割古谷地遺跡、道端遺跡、田屋遺跡の４遺跡が確認されているだけであり、遺跡の多くは荒川左岸の丘陵先端部や沖積地に存在している。なかでも荒島前山Ａ～Ｃ遺跡や発堀（はつぼり）遺跡の一帯は縄文土器の宝庫と言われていたが、国道113号線によって北側の遺跡はほとんどが消滅してしまったという［吉井1993］。全体的には小規模な遺跡が多く、そのほとんどが縄文中期である。荒川町周辺の縄文後期後葉から晩期の代表的な遺跡として城田遺跡があり、加曽利B3式期の竪穴住居跡（石囲炉）11軒、土坑23基、性格不明遺構８基が検出されている［田辺ほか2001a］。所属時期や柱穴配列を確認できないピットが201基確認されていることから、さらに多くの施設が存在した可能性が高い。長松遺跡では晩期中葉の大洞C1式注口付土器が出土している。日本海東北自動車道建設に先立って調査が行われた道端遺跡Ⅱでは、後期後葉と晩期前葉の遺物集中ブロック３か所、貯蔵穴と考えられる土坑３基が確認され、一括性に優れた多量の土器が出土している。また、同じく日東道建設にともなう確認調査で発見された昼塚遺跡・道下遺跡・野地（やち）遺跡でも当該期の遺物が出土している。昼塚遺跡は平成16年に本調査が行われ、基底面に加工材を敷いた袋状土坑を含む約140基の土坑や掘立柱建物を構成する柱穴20基、多量のクルミを出土した自然流路などが確認されている。大洞BC式期が主体となるらしい（平成17年報告書刊行予定）。野地遺跡はトレンチ数本による確認調査の結果、後期中葉～晩期前葉におよぶ多量の土器・石器のほか、柱根や堅果類の集積場所などが確認されている。

2　古墳時代

古墳時代の遺跡は、砂丘や丘陵端部・沖積低地における微高地上などに展開する。道端遺跡の周辺では、荒川左岸に古谷地Ｂ遺跡、右岸には長松遺跡群と衣田遺跡が確認されている。長松遺跡群が砂丘上である他は、微高地上に立地する。古谷地Ｂ遺跡では溝２条と土坑１基が検出され、古墳前期の北陸系土器が一括出土している［吉井1993］。長松遺跡からは古墳後期の竪穴住居４軒、掘立柱建物３棟、土坑６基［田辺1991］、衣田遺跡からは、古墳前期と中期の土師器が出土している［田辺ほか2001］。日東道建設にともなって調査された道端遺跡平成16年調査区（道端遺跡Ⅲ）では、古墳前期の竪穴住居５軒、掘立柱建物３棟、円形周溝状遺構２基、樹皮材を敷いた土坑などが検出され、この周辺の拠点的な集落であった可能性が高いと推測されている（平成17年報告書刊行予定）。

3　古　　代

大和朝廷は阿賀野川以北の進出拠点として、648（大化４）年に磐舟柵を設置した。柵の所在地について、村上市と神林村に接する旧岩船潟周辺説や諸上寺とする説と、地名が「柵戸（きのと）」に通じ、古代

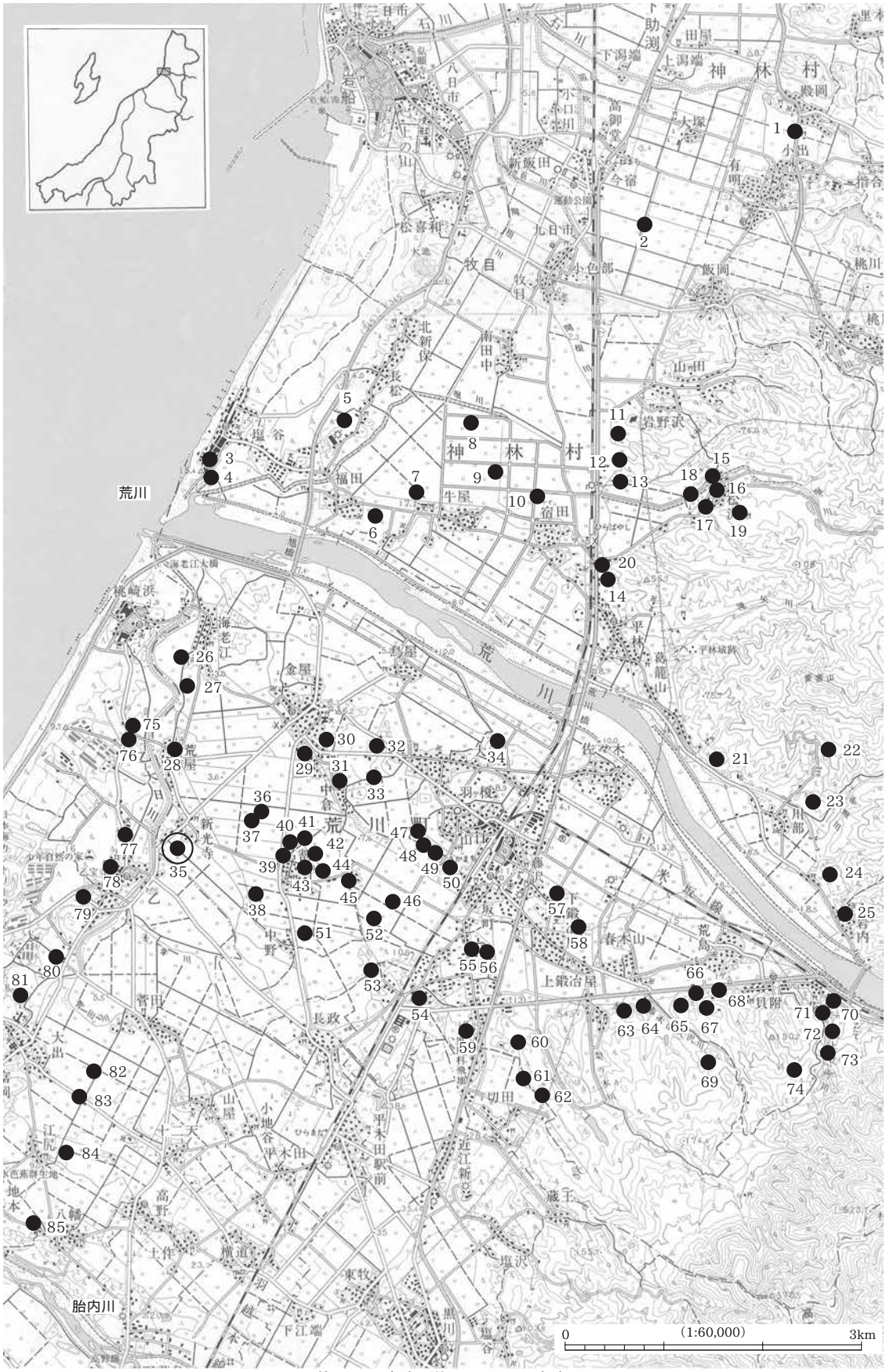
の塔心礎が残る中条町乙（乙宝寺）付近とする説があるが、磐舟柵に比定される遺跡・遺構はまだ発見されてない。

この時期の遺跡は、荒川町では現在までに37遺跡が確認されているが、7世紀代および10世紀後半～12世紀代の遺跡は確認されていないらしい［石川ほか2002］。第4図には、中条町で7遺跡、荒川右岸の神林村で12遺跡を示した。

田島遺跡では、K90号式の施釉陶器と10世紀前半の土器が竪穴住居一括で出土した。また、9世紀中葉の鴨侍遺跡では、7×3間片面廂の大型建物を中心に建物軸がほぼ揃う掘立柱建物群が検出され、建物をめぐる溝からは円面硯や風字硯が出土している。高柳B遺跡では、8世紀後半の土坑一括資料が出土し、打ち込み工法による掘立柱建物が確認された。元山窯跡群は8世紀後半から9世紀前半の須恵器窯7基と、それ以降に操業された製鉄炉1基・木炭窯3基が確認された。近隣には、須恵器窯の可能性のある遺跡が丘陵裾部に展開しており、それら生産遺跡の広がりと製品の流通範囲の解明など課題は多い。松山窯跡は9世紀前半の須恵器窯2基と竪穴状遺構2基が確認された。旧紫雲寺潟縁辺やそれに流れ込む河川沿いには、「物品」「九九」木簡が出土した草野遺跡、盤や8世紀代の木簡出土の屋敷遺跡、「少目」荷札・習書木簡出土の蔵ノ坪遺跡、盤・「荷」「郷」木簡出土の船戸桜田遺跡、盤・「土師船守」木簡出土の船戸川崎遺跡、盤・「南無阿弥陀佛」木簡出土の青田遺跡、盤・木簡出土の中倉遺跡など、内水運を窺わせる古代遺跡が展開している［水澤2002］。

No.	遺跡名	時代区分	No.	遺跡名	時代区分	No.	遺跡名	時代区分	No.	遺跡名	時代区分
神林村			23	川部	縄文	45	野口	古代	68	発堀	縄文
1	城田	縄文	24	下山	縄文	46	田屋	縄文･古代･中世	69	山田	縄文
2	高田	古墳	25	小岩内	縄文	47	坂町宮ノ腰D	古代	70	山ノ下	縄文
3	渡古屋敷	古代	荒川町			48	坂町宮ノ腰C	古代	71	花立	縄文
4	古屋敷	古代	26	屋敷添	古代	49	坂町宮ノ腰B	古代	72	花立前山	縄文
5	長松	縄文･弥生・古代	27	古町	縄文	50	坂町宮ノ腰A	古代	73	大山B	縄文
6	西部	古代	28	行塚	古代	51	高柳B	古代	74	大山C	縄文
7	中部	古代	29	赤井	古代	52	高柳A	古代	中条町		
8	衣田	縄文・古墳･古代	30	宮分	古代	53	下野	古代	75	上相子	古代
9	道上	古代	31	舘ノ腰	古代	54	宮林	古代	76	地蔵堂	古代
10	家ノ後	古代	32	石橋A	古代	55	大道端B	古代	77	乙	弥生
11	黒田B	縄文･古代	33	中倉諏訪ノ木	古代	56	大道端A	古代	78	乙宝寺	古代
12	黒田A	縄文･古代	34	田島	古代	57	向屋敷	古代	79	城山	古代
13	持体	古代	**35**	**道端**	**縄文･弥生･古墳**	58	諏訪ノ木	古代	80	二ツ山	古代
14	向山	古代	36	鴨侍	古代	59	北田	古代	81	中島	古代
15	松沢屋敷添	古代	37	寺田	古代	60	元山窯跡群	縄文･古代	82	江添	縄文
16	鯉池	古代	38	前谷地	古代	61	笹谷	古代	83	昼塚	縄文
17	寺田	古代	39	古谷地A	古代	62	笹谷南	古代	84	道下	縄文
18	下谷地	縄文･古代	40	古谷地B	古墳・古代	63	谷内	縄文	85	野地	縄文
19	舘野	縄文	41	金屋小谷地	古代	64	春木山城	縄文			
20	神上り	縄文	42	名割古谷地	縄文･古代	65	荒島前山C	縄文			
21	湯ノ沢	縄文	43	名割宮ノ腰	古代	66	荒島前山B	縄文			
22	川部長峰	縄文	44	名割	古代	67	荒島前山A	縄文			

第1表　周辺の遺跡



第４図　遺跡の位置と周辺の遺跡

［原図　国土地理院「村上」「中条」1/50,000 を縮小］

第Ⅲ章　グリッドの設定と層序

1　グリッドの設定（第６図）

道路法線がカーブする地点に調査区が存在することから、区内に位置する任意の基準杭２点：No.117（世界測地系X=234901.350、Y=80472.901）、No.120（X=234858.808、Y=80515.211）を結んだラインを東西方向の主軸としてグリッドを設定した。なお、No.117は5Fグリッド杭、No.120は11Fグリッド杭に相当する。グリッド南北方位の主軸は真北から45.09°東偏している。

グリッドは大グリッドと小グリッドからなり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25等分したものである。大グリッドの名称は北西隅を基点とし、南北方向をアルファベット、東西方向を算用数字として「7E」のように呼称した。小グリッドは1～25の算用数字で表わし、北西隅を1、南東隅を25とした。表記は大グリッドの後につけて「7E15」のように呼称した。

2　層　　序（第５図）

基本層序は、次のとおりである。

Ⅰ層　耕作土。水田耕作土で、近・現代の陶磁器片を若干含んでいる。

Ⅱ層　赤褐色腐植土。いわゆるガツボ。倒木・種子等未分解の有機物から構成され、異臭を放つ。自然流路にのみ堆積する。

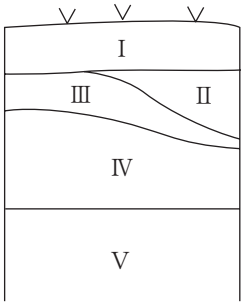
Ⅲ層　灰褐色粘質土　古墳時代の遺物包含層。しまりがなく、粘性が強い。炭化物を多く含む。ほとんどが削平され、わずかに遺構覆土として残存している。

Ⅳａ層　青灰色シルト。縄文時代晩期の遺物包含層。遺物集中ブロック周辺では炭化物を多く含み、やや茶色がかる。それ以外の地点ではⅣｂ層との識別が困難。地点により火山灰と推測される白色細砂の分布がわずかに認められた。

Ⅳｂ層　青灰色シルト。遺物・炭化物を含まないⅣ層下部を便宜的に取り扱う。

Ⅴ層　緑灰色砂質土。青灰色シルトをラミナ状に含む。金雲母粒子を多量に含み、キラキラと光る。

平成14年度調査［渡邊ほか2003］と基本的に変わりないが、本調査区では炭化物層および火山灰層の存在は極めて微弱であった。



第５図　基本層序模式図

第６図　グリッド配置と地形測量図

第Ⅳ章　遺　　構

1　縄文時代の遺構

土坑１基、遺物集中ブロック１か所を検出した。SX008は自然の落ち込みの可能性が高いが、今後に課題を残すことから遺構に準じて本節で取り上げることとする。

平成14年調査［渡邊ほか2003］の成果から、遺構の存在が炭化物の分布と相関関係にあることが予測された。そこで、炭化物が比較的多く確認された小グリッドではサブトレンチを入れて断面観察を行った（図版11）。その結果、土坑（SK001）１基を検出することができた。しかし、平成14年調査と比較して炭化物の集中度は低く、炭化物集中範囲として一定の面積をくくることができなかった。

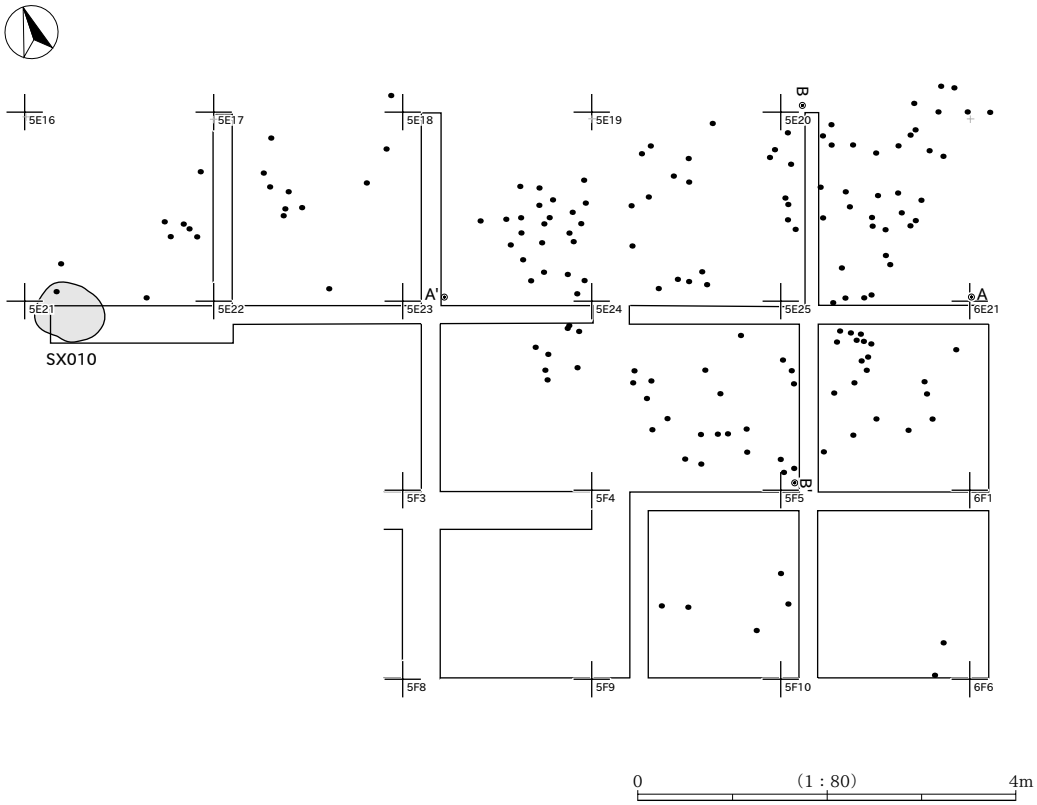
A　遺物集中ブロック（第７図）

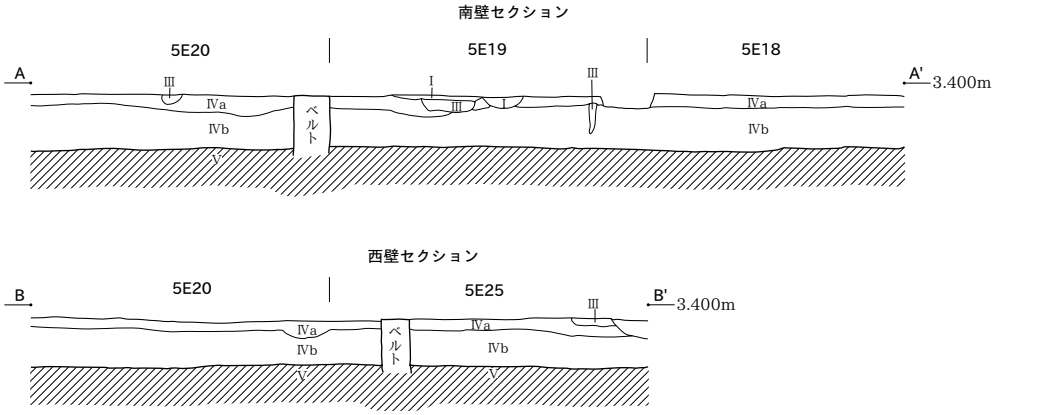
5E16～25グリッド周辺にある。粗密はあるものの、東西50m・南北20mほどの範囲に遺物が集中して分布していた。調査区全体をとおして縄文時代の遺物のほとんどがこのブロックから出土している。やや離れた5E8グリッドでもまとまって遺物が出土したが、これは土層観察用の東西ベルトによって寸断された結果であり、同じブロックと捉えたい。調査時は、当ブロックが竪穴住居の覆土である可能性を想定し、小グリッドの四周にベルトを残して、土層を観察しながら掘り下げた。その結果、遺物はⅣａ層に包含され、多くの炭化物を伴うことが判明したが、遺構は確認することができなかった。また、炭化物の分布には粗密があり、その分布範囲を結線することはできなかった。念のため、調査の最後に深さ60～70cmの深掘りを行ったが、遺構の痕跡は確認できなかった。

調査時における所見では、同一個体と推測される土器破片がまとまって出土する傾向がうかがえ、ほぼ完形に近い状態で出土する例も認められた（図版10）。また、ブロック出土土器の器種組成を見てみると（第Ⅴ章１Ａ１）参照）、ほとんどが粗製深鉢で占められていることが分かる。平成14年調査（道端遺跡Ⅱ）で検出された遺物集中ブロックと比較すると、規模が小さく、器種のバラエティーが少ない点が指摘できる。この差異は、ブロック形成要因と関係するものと推測される。

B　SK001（図版１）

6E19・20グリッドにある。逆台形状の断面形態を呈する土坑で、確認面から深さ50cm、底面径で115cmを測る。現代の耕作土であるⅠ層が覆土２層直上にまで及んでいることから、本来はさらに深い土坑であったであろう。平面形態は不詳な点が多いが、上下につぶれたような楕円形をなすらしい。本遺構は、包含層調査時に特に炭化物の集中が認められたことから設けたサブトレンチの北壁断面（セクションＡ－Ａ'面）で確認された（図版11）。深さ20cmほど掘り下げたところで厚さ5cmほどの焼土（６層）が発見されたことから、当初は、竪穴住居の可能性を考慮して調査を行った。しかし、さらに下部から土器片がまとまって出土したことから、より広範囲で壁面観察を行った。その結果、焼土は中央がやや落ち込む擂鉢状を呈し、またその窪みに沿って炭化物粒子を含む青灰色シルト（２～４層）が堆積していることが確認できた。土坑の壁面は、地山（Ⅳｂ層）に含まれる砂層が途切れる部分を目安として認識した。焼





遺物集中区
Ⅳa層　青灰色シルト。炭化物を多く含み、地点により特徴的な薄茶色を呈する。遺物を多く包含する。
Ⅳb層　青灰色シルト。炭化物を含まない。
Ⅴ層　緑灰色砂質土。

0　(1：50)　2m

第７図　遺物集中ブロック

土は、硬く焼き締まって直下の７層が紫灰色に変色していることから、土坑内に廃棄されたものではなく、７層上面で火が焚かれた結果と判断した。Ａ－Ａ'セクションで焼土が途切れているように見えることから、投げ込まれた焼土塊であるとの意見があるかも知れないが、面的調査の結果、木の根などの攪乱により一部分だけ焼土が失われたことが判明した（焼土平面図）。焼土上面には白色有機物が厚さ3cmほど堆積していた。検出時点においても針または管状有機物が確認されており、焼けた骨片が集積したものと推測のうえサンプリングを行った。自然科学分析の結果、アユ・コイ科・サケ科などの淡水魚類や大・中型哺乳類の骨が検出されている（第Ⅵ章参照）。他に焼土内からは、炭化材（クリ・ヤマグワ・クスノキ科）や炭化種実（ミズキ？・メナモミ）も確認されている。土坑本来の深さは後世の削平により不明ではあるが、焼土が形成された９層上面の様子から、土坑がある程度埋まった後の浅い窪みの状態で火が焚かれたと推測される。

C　SX008（図版１）

6D24・25、6E4・５グリッドにある。自然の落ち込みと判断したが、遺構の認定にかかわる問題を内包していると考え、以下に若干の検討を試みる。

調査の過程を振り返ってみると、6E5グリッドの包含層発掘時に炭化物と土器片がまとまって出土したことから、サブトレンチを設けてＡ－Ａ'壁面の土層観察を行った（図版11）。１～２層はあまり炭化物を含まず、比較的水平な堆積を示したが、３層は多量の炭化物を含み、北側方向に傾斜する様子が確認できた。４層もほぼ同じ傾斜で堆積し、遺物集中ブロックに特徴的な薄茶色がかった色調を示した。遺物は３層のみから出土し、同一個体の土器片十数点が層の傾斜に沿って、やや北側に落ち込むように分布していた。炭化物や遺物が出土するものの、明瞭な立ち上がりを確認できなかったことから、北側に向かって傾斜する自然の落ち込みと判断した。しかし、念のために行ったＢ－Ｂ'面の土層観察の結果、１～４層が擂鉢状に落ち込む様子が認められ、立ち上がりの不明瞭な土坑である可能性がないか検討を迫られることとなった。

普段、遺構を認定するにあたっては、地山となる土層を人為的に掘り込むことによって生じた不整合面（「立ち上がり」）の有無が重要な基準となる。しかしこれだけでは、自然の営為によるものとの識別が難しい場合が生じる。そこで、底面から立ち上がる角度が比較的急であること、平面および断面形態、覆土の堆積状況などを総合的に判断しているのが実際であろう。SX008は、炭化物を含まないⅣｂ層と擂鉢状に落ち込む３～４層との間に不整合面を生じているものの、底面は丸く、壁の立ち上がりは緩やかである。これまでの慣習的な判断基準からすれば土坑と認定することはできない。SK001に隣接していることなどから、遺構の可能性が皆無だと断定できないが、ここでは自然の落ち込みと判断した。一方、土層の傾斜が比較的急角度となる部分でSX008を検出した場合には、遺構と認定してしまう可能性が高いと思われる。遺構識別に関わる一つの事例として報告する所以である。

D　SX010（図版２）

5E16・5E21グリッドにある焼土である。焼土の広がりは長軸75cm、短軸60cmの楕円形を呈し、厚さは5cmほどである。Ⅳｂ層上面で検出され、断面形態は中央が若干窪んで擂鉢状を呈する。局所的に焼土の集中が認められたものの、大部分はⅣ層青灰色シルトがブロック状に混入して、焼土の占める割合は低い。また、被熱による地山の変色や硬化なども認められず、SK001から出土した焼土とは異なる。この違いは、燃焼度の強弱によるものと推測される。上面には白色有機物が薄く堆積しており、針または

管状の骨片が認められた。自然科学分析の結果、コイなどの魚類や小型哺乳類が検出されている。

竪穴住居の炉跡である可能性を考慮して精査を行い、さらに周辺を50cmほど掘り下げて断面観察を行ったが、遺構を確認することはできなかった。

2　古墳時代の遺構

溝３条を検出した。古墳時代の包含層であるⅢ層：灰褐色粘質土は、色調および粘性の強さにおいて非常に特徴的であったが、後世の攪乱によりほとんどが削平されていた。わずかに、古墳時代の遺構および自然流路にのみ残存が認められた。

A　SX003・SX004・SX009（図版２）

調査当初は別々の遺構と認識していたが、その後、一連の遺構である可能性が高いと判断するに及んだため、ここではまとめて取り扱うこととする。

遺構はⅣａ層で検出した。覆土の特徴はすべて共通し、しまりがなく、粘性が強い灰褐色粘質土である。SX004は10cm、SX009は15cmと深さは総じて浅く、SX004では平面プランは捉えられたものの、掘り上げるほどの深ささえ有していなかった。これは、すでに第Ⅲ章２で触れたように、後世の攪乱によりⅢ層がほとんど削平されていることに起因しており、構築当時の遺構の規模は現状とはだいぶ異なっていたことだろう。

遺構の主軸方向は、SX003・004が東西、SX009が南北にほぼ沿っており、３基の配置は東方向に開くコ字状になる。古代の自然流路であるSX005がⅣ層を切って形成されていることから、SX009に対応する南北軸の溝がもう１基存在した可能性がある。また、削平がかなり及んでいることを考慮すれば、３基の遺構が途切れることなく一連の溝を成していた可能性もあろう。墳墓の可能性を考慮して、主体部に相当する地点の遺構検出に努めたが、確認することはできなかった。

以下、各遺構について個別に説明を加えるが、SX004から出土した土師器の特徴から、３基の遺構は古墳時代前期に帰属するものと考えている。

SX004は9E7・12グリッド周辺にあり、中央部が少し東側に張り出した溝状を呈する。長さ440cm、幅95cmをはかり、長軸方向は真北から86度西偏する。東側端部付近が一段低くなり、この地点からは土師器の甕や高杯・鉢などが集中して出土した。また、西側端部においても甕１個体がその場で潰れたように出土した。この甕は遺構検出面よりも10cmほど上で出土しており、このことからも本遺構がかなり削平を受けていることが分かる。断面形態は皿状をなし、覆土下部には炭化物片が多く含まれていた。特に、西側のセクション・ライン付近では、底部から壁際にかけて直径5mm程度のやや大きな炭化物の集中が認められた。

SX009は8E4・8E9グリッド周辺にあり、両端がややすぼまる溝状を呈する。長さ295cm、幅60cmをはかり、長軸方向は真北から20度西偏する。断面形態はＵ字状で、３基のなかでは最も深い。覆土は灰褐色粘質土の単層で他２基と共通するが、炭化物を全く含まない点で異なる。遺物は出土しなかった。

SX003は8D14・15グリッド周辺にあり、他２遺構に比べて不定形な溝状を呈する。長さ240cm、最大幅110cmをはかり、長軸方向は真北から86度西偏する。灰褐色粘質土の広がりとして検出された

ものの、断面観察では覆土の厚さがほとんどなかった。そのためセクション図を作成していない。古代に帰属するであろうSX002によって１部が切られている。覆土中には炭化物を含むがSX004ほど多量ではない。

3　古代以降の遺構

６次にわたる道端遺跡の既往調査のなかで、本調査地点で新たに得られた知見は、古代の川跡の存在である。SX005・006・007の３本の流路は、表土を除去した時点で検出され、赤褐色腐植土、いわゆるガツボとして当初から認識された。比較的新しい流路であるとの見通しから、トレンチを数か所設け、断面観察をして調査を終了する予定であった。しかし、SX005の9D14グリッド周辺から墨書土器を含む須恵器や土師器がまとまって出土したことから、遺物を含む層まで発掘を行うこととした。なお、SX005・006の一部を深さ2mほどまで深掘りした結果、２層より下層に遺物を含まないことから完掘していない。

確実に遺物が伴出したSX002・005以外は時期を特定できないが、便宜上本節にて取り扱う。

A　SX002（図版２）

8D15グリッドにあり、SX003を切って構築されている。長軸105cm、短軸95cmの楕円形を呈し、確認面から深さ40cmをはかる。東側にテラスを形成して、西側に向かって傾斜する。また、西側の壁はオーバーハングしており、底面が一方に寄る。覆土はⅡ層を基調として３層に分かれるが、８世紀末の土師器甕が１・２層から出土した。いわゆるガツボを覆土の基調とする点は隣接するSX005と共通し、両遺構の埋没時期が近いことを推測させる。断面形態などから、当初は風倒木痕の可能性を検討したが、明確な覆土の逆転が認められないことや平面プランが比較的整っていることなどから、人工的な遺構と判断した。

B　SX005（図版３）

9D～10Eグリッドにおいて、調査区を斜めに縦断するように検出された自然流路である。現状で長さ27m、幅は約７～8mをはかる。トレンチを入れて、深さ2mほどまで１部を掘り下げたが底面まで達することはできなかった。土層観察の結果、２層以下では遺物が出土しなかったことから、現地表下80cmまでセクション図を作成して調査を終了した。なお、平面図に示した下場のラインはほぼ３層上面に相当する。覆土はⅡ層：いわゆるガツボを基調として、白色粗砂や青灰色シルトなどを含む。遺物は、１層下部の粗砂を多く含む土層からのみ出土した。セクション図の西側立ち上がり部分で明らかなように、覆土中にⅢ層が落ちこむことから、古墳時代前期には流路として機能していたことが分かる。しかし、２層以下で遺物が伴出しなかったことから、縄文時代にまでさかのぼり得るか否かは判断できなかった。また、8Dグリッドで SX006と合流するが、切り合い関係を確認できなかった。

C　SX006（図版３）

7D～8Fグリッドにおいて、調査区を縦断するように検出された自然流路である。長さ28m、幅5.5～6.5mをはかり、北側でSX005と合流して調査区外へ延びる。トレンチ調査により深さ約2mまで確

認した後、深さ50cmほどまで記録化した。東側立ち上がり部分では、２層によってⅢ層が切られていることから、古墳時代以降に形成された可能性が高い。覆土はⅡ層：ガツボを基調としている点ではSX005と共通するが、白色粗砂層を含まない点で異なる。SX005の１層がⅣ層を切り、SX006の２層がⅢ層を切ることが確認されたが、両遺構の前後関係は判断できなかった。また、両遺構の覆土を明瞭に区別することが難しく、合流地点において切り合い関係を確認することはできなかった。

D　SX007（図版３）

8E～10Fグリッドを東西に流れ、8F23グリッドでSX006と合流する。合流部での切り合い関係は把握できなかった。本遺構は底面まで完掘することができた。現状で長さ25m、深さ25cm、幅2mをはかる。覆土は２層に分かれ、SX006と同様に粗砂を混入しない。表土掘削時には、SX007にほぼ平行するようにブルーシートを敷いた水路が確認されており、またSX005や006と比べて非常に浅いことから、近現代の溝である可能性もある。しかし、覆土がSX006と酷似している点には躊躇を覚え、遺物の出土がないことから時期比定は保留せざるを得ない。

第Ⅴ章　遺　　物

コンテナ12箱の遺物が出土した。縄文晩期が最も多く８箱で、次いで古代（８世紀末）２箱、古墳前期２箱、弥生中期４点と続く。縄文晩期の遺物の出土は、遺物集中ブロックと土坑（SK001）の周辺に限られており、活動の軌跡が限定的・小規模であったことを推測させる。また、他時期の遺物は、包含層そのものが削平されていたため、川跡（SX005）やわずかな遺構から少量出土したに過ぎない。

１　縄文時代晩期の遺物

Ａ　遺物集中ブロック（図版４～６）

１）土　　器

深鉢・台付深鉢・壺・注口付（あるいは壺）が認められ、深鉢は有文精製土器と粗製土器から構成される。土器の遺存状態が極めて悪く、器面の摩滅や剥落が著しい。そのため接合作業に非常に手間取ったが、器形や文様が判断できるものや、胴部破片であっても異なる個体と認識されたものについては、ほぼすべてを図化した。その他、掲載しなかった遺物として、深鉢の底部破片22個体が存在する。そのような作業の過程で認識できた遺物集中ブロックの最小個体数は、深鉢（有文精製・粗製）55・台付深鉢２・壺２・注口付または壺１個体で合計60個体となる。器種に関係無く、胎土中には長石・石英・金雲母が認められ、わずかに20・22では海綿骨針が混入していた。

１～12は有文精製土器である。文様は充填縄文手法によって描かれている。本来は無文部が研磨された精製品のはずだが、器面の荒れが顕著であり粗雑な感じを受ける。１は、球形の胴部から一度強くすぼまり、その後、口縁部にむかって外反する。口縁部は振幅の小さい緩やかな波状を呈し、８単位に復元することができる。口縁部には縄文帯がめぐり、くびれ部を境にして上下を装飾帯とする。仮に、口縁部縄文帯・胴上部装飾帯・胴下部装飾帯を、それぞれⅠ文様帯・Ⅱａ文様帯・Ⅱ文様帯とすると、Ⅱａ文様帯は全面に平滑に研磨が施され、Ⅰ文様帯の波頂部に対応して三叉文が加えられる。三叉文は「へ」字状を呈し、独立した単位文というよりも、上部に開口する弧線が対になったような印象を受ける。Ⅱ文様帯は、Ⅱａ文様帯とは入念な研磨による段によって画され、２本の沈線間を磨り消した無文の帯を下限とする。LR斜縄文を地文として、連弧状無文部を貫入させてモチーフを描出している。弧線の連結部で左右から伸びた沈線が入り組んで円文を作りだし、その上部には三叉状の沈刻が付加される。胴部最大径部より下は縄文のみとなる。２～４は波状口縁深鉢で、１と同様、波頂部に三叉文が描かれるもの。ただし、Ⅰ文様帯が１本の縄文の帯であった１に対して、２～４は波頂部で途切れる点が異なる。６・７は同じ器形の胴上部破片であろう。５は口縁部～胴上部が直立ぎみに立ちあがるもので、口縁部はわずかに波状を呈する。Ⅰ・Ⅱａ文様帯の区分がなく、直立した部分全面に充填縄文手法による文様を描く。三叉状沈線が左右から連結して円形や矩形の無文部を作り出している。8a・8bは平口縁深鉢の口縁部と胴上部破片である。口縁端部が厚く、断面四角形に作られているのが特徴的で、幅広い縄文帯が口縁部にめぐる。8b拓本上部の縄文帯が8aの口縁部縄文帯に対応することから、ほぼ直立した器形を呈し、口縁部直下に左下がりの入組文が描かれることが分かる。９～12はくびれ部を持たない器形のもので、口縁部はわずかな

波状を呈する。9～11は上に開口する弧線が口縁端部に接続して描かれるが、弧線が波頂部を囲むもの（10a）と、弧線端部が波頂部と連結するもの（11）の２者がある。12は器面の剥落が著しいが、左に開口する鋸歯状沈線文が２段にわたって施されている。それ以下は縄文となる。13は口縁部を無文帯とするもの。やはり緩やかな波状を呈し、口縁部は研磨される。しかし、拓本に見えるとおり、無文帯とそれ以下の縄文部を画する沈線が所々２本になっており、仕上げは丁寧とは言えない。なお、本例は台付深鉢とすべきかも知れない。15は赤色顔料を混ぜた漆を外面に塗布したもので、内面の調整が粗いことから壺または注口土器の胴部下半であろう。モチーフは不明だが、充填縄文手法が採用されている。18・19は台付深鉢の台部で、この２点のみが確認された。16～17は壺で、頸部と胴部の境を沈線あるいは段によって画している。17a・17bは胴一個体で、頸部のすぼまりが弱いが、とりあえずは壺としておく。

20～39は粗製深鉢である。口端を面取りするもの（20・23a・24・25. 26）が多く、丸くおさめるもの（28・29a・31）は少ない。地文にはLR縄文とRL縄文が認められるが前者が多い。また直前段多条の縄（23・29など）や結節回転（25）が認められる。縄文の条の走向に注目すると、口縁部から胴部まで斜走のもの（20～27）と、口縁部から一定の幅だけ斜縄文で、それ以下は横走するもの（28～32）とがある。35は櫛歯状工具によって条線文が描き出されたもので、小破片を含めてこの１個体しか確認されていない。破片上端に形成された擬口縁・内傾する粘土紐の接合痕跡・内面におけるススの付着範囲などから図示したように上下を判断したが、櫛歯状工具の軌跡が上部に向かって集約することや、破片下部のほうが直径がやや大きいことから上下反転の可能性もある。38は無文の胴部で、縦位にほどこした研磨調整の工具跡が明瞭に残っている。底部圧痕は削りとられているものがほとんどだが、37では網代圧痕が認められる。

2）石　　器

石鏃２（43・48）、石錐１（55）、石匙１（49）、不定形石器２（51・53）、磨石２（56・57）が出土し、石材は凝灰岩（48）、チャート（43）、頁岩（49・51・53・55）、花崗岩（56・57）がある。携帯性の高い小型石器だけで構成され、石皿などの大型石器や、石器製作を示す石核や砕片・剥片は検出できなかった。なお、43・48・49にはピッチの付着が認められる。

48は柳葉形の大型石鏃である。ピッチの付着がなければ、尖頭器のように上下反転してしまうような形態である。基部は装着のため細く加工されている。なお、ピッチは基部だけでなく正面図左側面にも付着する。49は、剥片縁辺部に若干の加工を加えただけの石匙である。剥片の打瘤部に左右から加工を加えて作り出したつまみ部が特徴的で、靴形を呈する。つまみに付着したピッチは２条の筋となり、紐で緊縛されていた様子がうかがえる。51は打面側の一方の側面に加工を施しただけの剥片で、両面から剥離が施されて厚みのある刃部が形成される。55はつまみを作り出した石錐で、横長剥片を素材とする。打瘤部の厚みが明瞭に残り、素材の湾曲がそのまま断面形態に反映している。53はすべてがネガの剥離面で構成されていることから石核とすべきかも知れないが、基部を意識したような嘴状部が作り出されていたり、刃部と思われる側縁加工が施されていることから不定形石器として取り上げた。56・57は円礫素材の磨石で、周囲側面に磨耗面が形成される。特に57は、著しい使用により左側面形が直線的に改変され、表裏面と側面との境が稜をなしている。

当遺物集中ブロックは、出土量が限られ、小破片も多い。しかし、限定された空間で集中的に出土したことから、一括遺物に準じた資料と意義づけたい。口縁部に「八」状の無文部を形成して、そこに独立し

た三叉文を施文する器種が特徴的であることから、当ブロック出土資料は縄文晩期初頭：大洞B1式併行期に帰属させることができるであろう。

B　SX008（図版5）

自然の落ち込みから粗製深鉢1個体がまとまって出土した。焼成良好で堅緻なつくりの小型品で、2個一対の補修孔が内外面から穿たれている。口縁部を1段研磨して無文帯とする他は、器面全面にLR斜縄文を整然と施す。撚紐末端結節部の回転痕が明瞭で、原体の単位幅がよく分かる。底部から7cm程上までは縄文を施さず無文とする。

石鏃1点（47）が同じグリッドから出土した。2個一対の突起を側縁にもつ有茎鏃で、いわゆる「飛行機鏃」に酷似する。素材の形態をよく留めており、身の側面形がやや湾曲する。石材は鉄石英である。

C　SK001（図版5）

遺物集中ブロックと7m程離れた土坑底面付近から、42が大型破片となってまとまって出土した。41は土坑外の大型破片と土坑覆土上層の小破片とが接合したことから、遺構が埋没する過程で混入したものである。よって、SK001に伴うものではないが、遺構の埋没時期を推定する資料として便宜上ここで取り扱う。42は高さ41cmを超える大型深鉢で、直前段多条LRによる斜行縄文が器面全面に施される。撚糸を回転する1回の単位幅が短いためやや乱雑な感があるが、基本的には横位施文で統一されている。底部付近が無文となる特徴は遺物集中ブロック出土資料と共通する。41は口縁部を装飾帯とした小型有文精製深鉢である。淡褐色を呈し、シルト質の精良な胎土である。口縁部には、平行沈線間を縦に短く区切り、沈線内部を研磨して無文部を浮かび上がらせるように仕上げたいわゆる「連珠文」が施文される。また胴部では、LRとRLを交互回転することで羽状縄文を表出している。41は大洞BC2式に比定され、出土した縄文土器の中では最も新しく位置づけられる。

D　遺　構　外（図版5～6）

上記以外の出土遺物を遺構外として一括して扱う。石器のみで、土器は確認されなかった。石鏃3（44～46）、石錐1（54）、石匙1（50）、石核1（52）があり、遺物集中ブロック同様に石器製作を示す確実な資料は認められなかった。石材は流紋岩（44・52）、いわゆる「半透明な頁岩」（45）、頁岩（46・54）、凝灰岩（50）から構成されている。

石鏃の形態には有茎と無茎があり、遺跡全体を通して後者は46の1点のみの出土である。44・45は基部を欠損する。45・46にはピッチの付着が認められ、44の先端部は摩滅している。46の裏面にはいわゆる樋状剥離が明瞭で、先端部衝撃による破損と考えられる。50は基部をのぞく全側面に刃部加工を施した石匙で、両面から加工を施して両刃となる。52はすべてがネガ面で構成されていることから石核とした。なお、図示していないが、他に半透明頁岩製の有茎石鏃1点が遺構外（5D10グリッド）から出土している。

2　弥生時代中期の遺物（図版８）

わずか５点が確認され、そのすべてを図化した。川跡からの出土であるが、極めて微量であり、紛れ込みの可能性が高い。

87～89は、SX005の平安時代の土器と同じ１層から出土した。87・89は小松式土器の甕である。87は口縁内側に貼り付けた粘土紐に押圧を加えてフリル状の装飾を作出している。内外面共にハケ調整され、外面には煤が厚く付着する。89は底部破片であるが、外面にハケメがわずかに残る。88は深鉢の口縁部破片で、無節Ｒ縄文を地文として波状文を施す。波状文は条間の幅が一定しない数本一組の沈線で描かれ、植物茎などの軟らかい素材を原体としている可能性がある。

91・92はSX006の２層から出土し、92は川跡の縁辺からまとまって出土した。91は小型有文鉢の胴部破片で、上部に開口する弧線状の文様が充填縄文手法によって描かれる。しかし、縄文部と無文部の境がはっきりせず、モチーフも明瞭ではない。被熱により器面が脆弱なものの、内面ではハケメが明瞭である。92は外面を粗くケズリ調整した甕の胴下半で、底部には笹葉の圧痕が残る。縄文晩期末の可能性があるが、他に当該期の資料が認められないことからここに含めておく。

以上の土器は、87・89が小松式土器、91が福島県方面に分布の中心を置く磨消縄文系土器群、88が弥生前期以来の伝統が強い在地系土器に比定できる。同じような土器の組み合わせを検索すると、聖篭町二本松遺跡（新潟県1983：図版483）に類例を求めることができる。わずかな資料ながらこの５点の土器は、阿賀野川以北における弥生中期前葉の土器様相（様々な系統から構成される器種組成）を反映したものと考えられる。

3　古墳時代前期の遺物

A　SX004（図版７）

溝状遺構からまとまって出土し、実測可能な個体はすべてを図示した。高杯（58・59）、甕（60・62・64・65）、無頸壺（61）、鉢（63）がある。比較的脆弱な胎土のものが多く、淡褐色を呈し、直径１～２㎜の石英・長石・砂粒を含む。

58は高杯の杯部で、内外面ともにミガキ調整されるが、内面にはミガキ調整前のハケメがわずかに残る。内外面には黒斑が生じている。60・62の甕は、口縁端部を面取りし、く字状またはコ字状に口縁部が外反する。60は小破片からの復元実測であり、口径は推定である。62は、口縁～胴上部破片が遺構の西端部からまとまって出土した。その場でつぶれたように出土したことから、本来は完形のまま埋置されていた可能性が高い。無頸壺の61は、口縁端部を面取りせず、薄く仕上げられている。また、他の土器に比べて条間が広いハケメ工具を使用している。63の鉢では、口縁端部をなでた際の粘土のはみ出しが認められる。外面は条間の狭いハケメ・内面はナデ調整され、外面では黒斑が生じている。64・65は底部破片で、64のように上げ底ぎみとなるものもある。

本遺構出土土器群は、個体数が少なく、また器種が限定されていることなどから、その編年的位置づけには留保せざるを得ない点が少なくない。しかし、個別の特徴をもとに検討してみると、62は、頸部が直立気味に立ち上がり口縁部で外反する、いわゆるコ字状口縁の特徴から、川村浩司氏編年の３段階［川

村2000］などに比定することが可能であろう。そこで、ほぼ同時期の土器群をまとまって出土した中条町反貫目遺跡［寺崎ほか2004］と比較してみると、有段高杯・器台・壺といった器種が本遺跡では認められないものの、58・62・63の類似例を指摘することができる。以上の点から、おおまかではあるが、本遺構出土資料を古墳時代前期前半に位置づけておきたい。

B　SX005・遺構外（図版8）

SX005からは古墳前期と思われる土器が2点出土したが、客体的であることから、遺構外出土資料と共にここで一括して取り扱う。

SX005から出土した83は甕の底部破片で、小さく丸底気味の特徴から古墳前期と判断した。底部から胴部に向かって放射状にハケメ調整される。81は丸底・球胴・細かいハケメ工具などの特徴からここで取り扱った。外面は胴下半を縦位にケズリ調整し、上半にはかすかにハケメが認められる。内面は炭素の吸着が顕著で、細かいハケメとナデ調整が並存し、丸底気味の底部ではハケメの軌跡が螺旋を描く。なお、81はSX006と同一個体破片を共有している。

93・94は甕の口縁部破片である。94は、「く」字状に外反して、端部が面取りされる特徴から、古墳前期に比定することができる。93は94よりも外反の度合いが弱いもので、口縁端部があまり調整されずに薄く丸みをもつ。外面はハケ調整されるが、器面調整は粗雑で、接合痕がそのまま残っている。

4　平安時代以降の遺物

A　SX005（図版7）

川跡の比較的狭い範囲からまとまって出土した。須恵器杯（66～74）、土師器甕（75～80）、須恵器甕（84・85）がある。66～72は須恵器無台杯で、口径は13cm前後に集中する。全般的に焼きが悪く、茶色がかった灰色を呈する。内外面ともにロクロナデ調整で、底部切り離し痕は、72がヘラ切り後に手持ちヘラケズリする他は、ヘラ切り無調整である。また底部内面の外周近くの器壁が厚く、「器面のふくらみ」が形成されるのが特徴である。71では「称（または祢）」、72では「山」を記号化した墨書が底面に記されている。73・74は須恵器有台杯で、73もヘラ切りである。74は自然釉が付着し、硬質で青灰色を呈する。73は口径12.2cmを測り、無台杯同様に焼きが甘くて灰白色を呈する。

75～80は土師器長甕である。75・77は非ロクロ、76・78はロクロ成形である。両者は口縁部形態で顕著な違いを見せ、後者は口縁部の外反度が大きく、頸部から口端部までが長いのに対して、前者の外反度は小さい。また、76・77が口縁部を強くナデ調整するのに対して、75は口縁部までハケ調整がおよぶ。79・80は木葉痕を有する底部である。79は拓本両端、80は拓本上端で木葉痕が直線的に途切れ、木葉痕の外側には砂粒の圧痕が多く認められる。また木葉痕はいずれも平行脈の広葉樹を用いている。この底部形態は、東北地方北部の土師器に特徴的ないわゆる「砂底土器」との関連性が指摘されているものである。県内資料で初めてその存在を指摘した坂井秀弥氏の分類［坂井ほか1989］によれば、相対する両端に砂粒が付着し、その間に木葉痕が認められるパターン（底部c類）に該当する。

84・85は須恵器甕である。外面は平行タタキ目、内面は同心円当て具痕が明瞭であり、84の外面にはタタキ目の上に条線が数条入る。84は須恵器無台杯と同様に焼きが甘く、茶色がかった灰色を呈する。85の焼成は比較的硬質に仕上がり、暗青灰色を呈する。両者ともに胎土中には軟質白色粒子を多く含む。

86は土錘で、中央がふくらむ形態をなす。

須恵器無台杯の口径が13cm前後で、器高が低く浅身であること、ロクロ成形の土師器甕が伴い、口縁部が長く外反すること等の特徴から、吉井雅勇氏［吉井2004］のⅣ２期：８世紀末～９世紀初頭におおよそ比定することができよう。なお、中条町船戸川崎遺跡４次調査［水澤2002］では、71と同じ記号を墨書したほぼ同時期の須恵器無台杯が出土している。

B　SX002（図版８）

土師器壺（90）の胴下半が出土した。SX005出土破片と接合関係にあり、両遺構の埋没時期が近接していたことを示している。胴部は球形に張り、広い底部を有する。内外面ともに条間の広いハケメ調整が施され、ハケメは底面にまでおよぶ。口縁部～胴上部が欠損しているため器種の認定には躊躇するが、無頸広口壺としておく。SX005出土土器と同時期に比定できよう。

C　遺　構　外（図版８）

95～99は平安時代に帰属すると考えられる。95はロクロ成形の土師器甕で、外面にはヘラケズリ調整痕がわずかに確認できる。98a・98bは同一個体破片で、器面調整が粗く、輪積み痕をそのまま残している。99は丸底・筒形の小型品で、内面は指のようなものでナデた成形痕が明瞭である。

100は、本遺跡唯一の中世期の遺物で、珠洲焼の甕である。

第Ⅵ章　自然科学分析

1　道端遺跡出土骨片の同定

黒澤一男（パレオ・ラボ）

A　試料と分析方法

新潟県北部の岩船郡荒川町にある道端遺跡において、焼土中から骨片が確認された。そのため、焼土を採取し、1mm目のふるいで水洗し、ふるい上に残った試料を実体顕微鏡下で拾い出し、分類をおこなった。ここでは、遺跡西側に位置するSK001およびSX010から採取された動物遺体の同定結果について報告する。

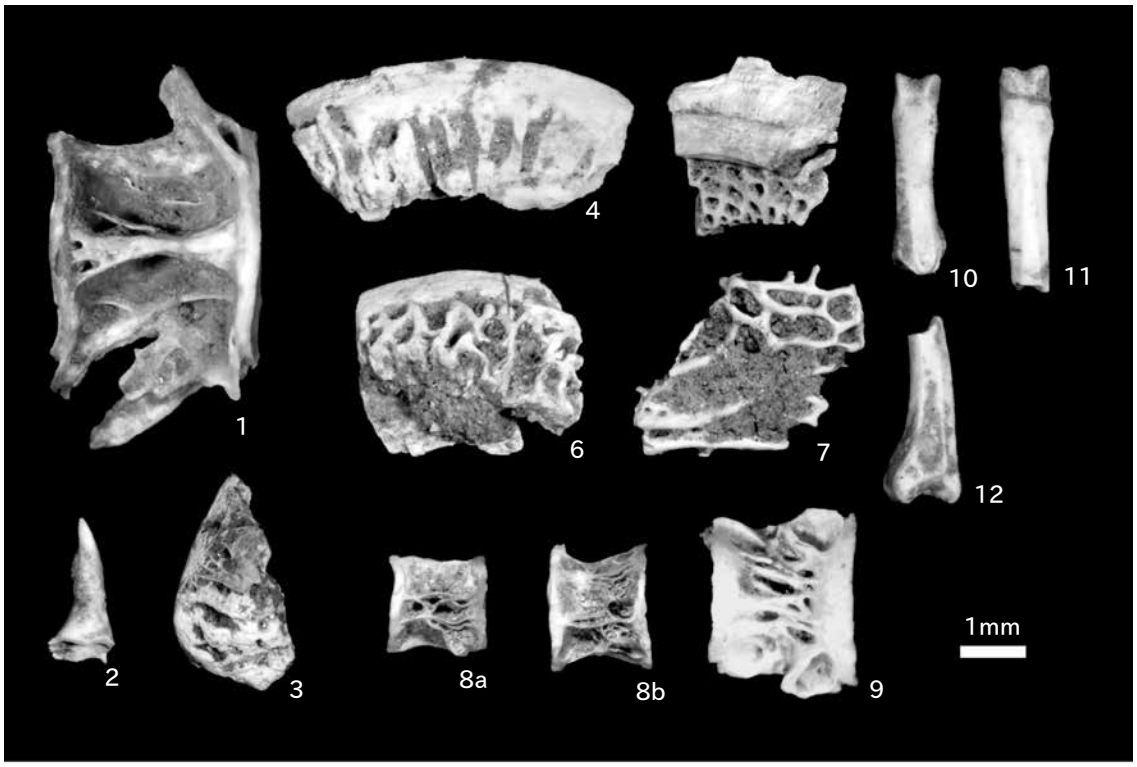
なお同定に際しては国立歴史民俗博物館西本研究室で所有している現生標本を観察させていただき、それら標本との比較により同定をおこなった。

B　骨片分析結果

道端遺跡から検出された動物遺体の同定結果を第２表に示す。試料のほとんどは焼骨である為、白色になり、元

遺構名	出土動物遺体
SK001	コイ科４（椎骨４），サケ科16（椎骨破片16），アユ38（椎骨38），魚種不明（椎骨多数） 骨片：1.25g（魚骨多，骨厚約5mmの緻密質あり）
SX010	コイ２（咽頭骨１，咽頭歯１），魚種不明（椎骨多数），小型哺乳類３（指骨３） 骨片：0.07g（魚骨多）

第２表　遺構出土動物遺体



1～3　コイ科（1尾椎；2咽頭歯；3咽頭骨）　4～7　サケ科　椎骨破片　1・4～9：SK001
8・9　アユ（8腹椎；9尾椎）　10～12　小型哺乳類　指骨　2・3・10～12：SX010

第８図　遺構出土動物遺体写真

の大きさより小さく変形している。また、それらは細片化しており、多くは同定が困難である。以下に動物遺体の検出状況を分類群ごとに記載をおこなう。

1）魚　　類

魚類からは、アユ、サケ科とコイ科が検出されている。

アユは、本遺跡から検出された試料の大半を占め、同定した試料はすべて椎骨である。椎骨の椎体横径は、1.5～2.7mm程度となり、大きいもので全長15cm程度の標本とほぼ同じ大きさ、小さいもので半分程度の大きさである。しかし、焼骨であることから、実際の大きさより小さくなってしまっていると考えられ、標本と同程度の大きさのものからもっと大きなサイズのものを食していたと考えられる。

サケ科とした試料もすべて椎骨であり、すべてが破片である。試料は火を受けて細かい骨片となっているが、形状からサケ科椎骨破片と同定した。比較的大きな椎骨の破片が目立つことから、おそらくシロザケではないかと考えられる。サケ科の骨は他の魚類に比べ残りにくいため検出される量は少ないが、試料の状態等を考慮すると、比較的多くのサケを捕獲していたと考えられる。

コイ科とした試料は、4個が椎骨であり、ほかには咽頭歯と咽頭骨が各1点検出されているのみである。椎骨は、その椎体横径がおよそ1.5～4mm程度であり、全長30cm程度の現生標本（マブナとウグイ）よりやや小さい。しかし、火による変形を受けていることを考慮すると、標本と同程度か、それ以上の個体とも考えられる。

魚種不明の椎骨が多数検出されている。火により変形、細片化しているため、同定にはいたらなかった。

2）哺　乳　類

SX010より小型哺乳類の指骨が3個検出されている。哺乳類の骨は小さな破片化しているため、ほとんどが種の同定は困難である。その中で、緻密質のみの破片が複数確認されている．緻密質の骨片の中には骨厚が5mm程度となるものも含まれ、比較的大型の哺乳類や中型哺乳類のものも含まれていると考えられる。

C　ま　と　め

道端遺跡の骨片試料は焼かれてしまっているため残存状態が悪く、種類の同定にいたるものが少なかった。しかしながら、魚類3種類が同定され、哺乳類の骨片が含まれることが確認された。

検出された種類は、淡水域に生息する種類であり、遺跡周辺で漁獲したものと考えられる。また同定にはいたらなかったものの、比較的大型の哺乳類も利用していたと考えられる。これらのことからこの遺跡では河川での漁労活動が主要な生業であったと思われる。

2　SK001出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

A　はじめに

ここでは、縄文時代晩期前葉の土坑SK001から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。この土坑は断面フラスコ状で、覆土中に厚い焼土が堆積し、その上部には骨と思われる白色粉がまとまっていた。炭化材は堆積物を水洗選別して取り上げられたものである。

B　試料と方法

取上げられた試料から、形状や大きさの異なる炭化材を選び、また同定可能な大きさの炭化材を、樹種同定試料とした。

同定は、炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の３方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、３断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子（株）製JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

試料番号	検出樹種
試料１	クリ（３破片）
試料２	ヤマグワ（１破片）
試料３	クスノキ科（１破片）
試料４	クスノキ科（３破片）

第３表　炭化材樹種同定結果一覧

同定した炭化材の残り破片は、（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

C　結　　果

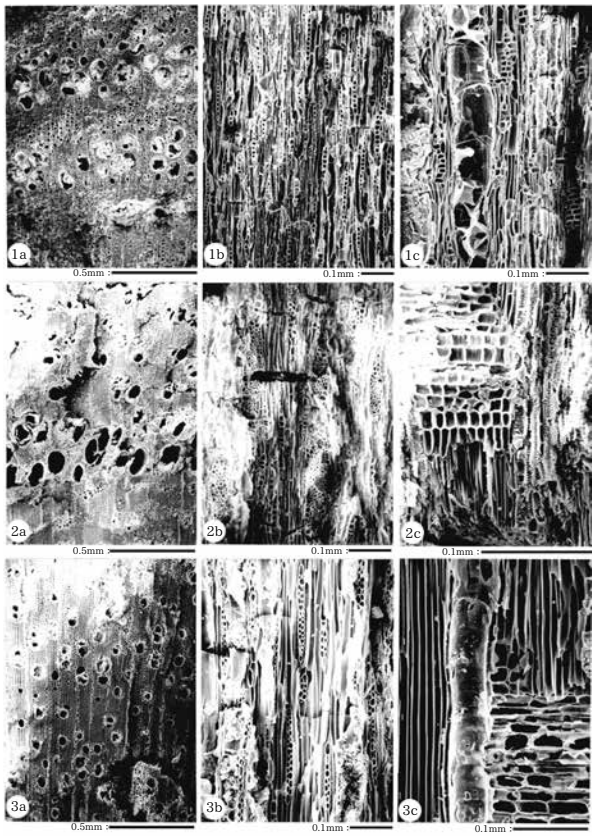
検出された分類群は、クリ・ヤマグワ・クスノキ科の３分類であった（第３表）。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の３方向の組織写真を提示する。

①クリ　*Castanea-crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　第９図 1a-1c（試料１）

年輪の始めに中型の管孔が約３層配列し除々にまたは急に径を減じ、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースが発達している。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材は粘りがあり耐朽性にすぐれている。



1a-1c：クリ（試料1）　2a-2c：ヤマグワ（試料2）　3a-3c：クスノキ科（試料3）

第９図　SK001出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真

特に縄文時代では柱材や燃料材などクリ材の多用が知られている。

②ヤマグワ　*Morus austoralis Poiret*　クワ科　第９図　2a-2c（試料２）

年輪の始めに大型の管孔が配列し除々に径を減じ、晩材では小型や非常に小型の管孔が複合して接線状・斜状・波状に分布する環孔材。道管の壁孔はやや大きくて交互状、穿孔は単穿孔、小道管にらせん肥厚があり、内腔にはチロースが発達している。放射組織は異性、１～５細胞幅の紡錘形で上下端に方形細胞や直立細胞がある。

ヤマグワは落葉高木または低木で、温帯から亜熱帯の山中に広く分布する。果実は食用となり、材は重硬・強靭で心材は特に保存性が高い有用材である。縄文時代の遺跡からクリと同様に出土頻度が高い樹種である。

③クスノキ科　Lauraceae　第９図　3a-3c（試料３）

やや小型の管孔が単独または２～３個が放射方向に複合して分布し、周囲状柔組織が顕著な散孔材。道管の壁孔は交互状や階段状への移行が見られ、穿孔は主に単穿孔であるが階段数の少ない階段穿孔も混じる。放射組織は異性、主に２細胞幅、上下端に大きく膨らんだ油細胞がある。管孔が大型で油細胞の出現頻度の高いクスノキ以外の樹種であるが、クスノキを除きクスノキ科の材は類似性が高いので、これ以上は属種の区別はできない。

クスノキ科は多くは暖帯に、一部は温帯～冷温帯に生育し、多くは常緑の高木または低木である。葉や材に油細胞があり特有の香りがする。

３　道端遺跡から出土した炭化種実

新山雅広（パレオ・ラボ）

Ａ　はじめに

道端遺跡は、岩船郡荒川町大字南新保字蟹田地内の沖積低地に立地する。本遺跡は、縄文時代晩期を主体とした遺跡で多数の土器・石器の他、平安時代の河川跡や墨書土器などが検出されている。ここでは、古植生や利用植物を明らかにする一端として、縄文時代晩期前葉の土坑（SK001）より出土した炭化種実を検討した。

Ｂ　試料と方法

炭化種実の検討は、SK001より検出された試料１と２の合計２試料について行った。本試料は、動物遺存体分析用サンプルに含まれていた炭化種実である。炭化種実の同定・計数は実体顕微鏡下で行った。

Ｃ　出土した炭化種実

同定されたのは、ミズキ？炭化核、メナモミ炭化果実、不明炭化種子？である。以下に、各試料の炭化種実を記載する。

試料１　微細な破片が３片含まれており、１片はミズキの可能性がある。他の２片もおそらく同一種と思われる。

試料２　微小種実が２個体含まれており、１個体はメナモミ炭化果実である。もう１個体は、定かでは

ないが、種子の可能性がある他、芽などの可能性もある。

D　形 態 記 載

①ミズキ？　*Cornus controversa* Hemsley ？ 炭化核

ミズキ核は、完形であれば、扁円形～円形で基部に大きな臍があり、先端は円頭または尖り気味になる。表面には不規則でやや深い縦溝が走る。出土核は、小さな破片が３片であり、径1,2,3mm程度である。このうち、3mm程度の破片は、表面にミズキかと思われる縦溝が認められる。しかし、余りにも小さな破片であるので確定し得なかった。

②メナモミ　*Siegesbeckia pubescens*（Makino） Makino　炭化果実

倒卵形で下部は細くて湾曲する。頂部は切形で中央に短い円形の突起がある。長さ2.7mm、幅1.3mm程度。

③不明　unknown　炭化種子？

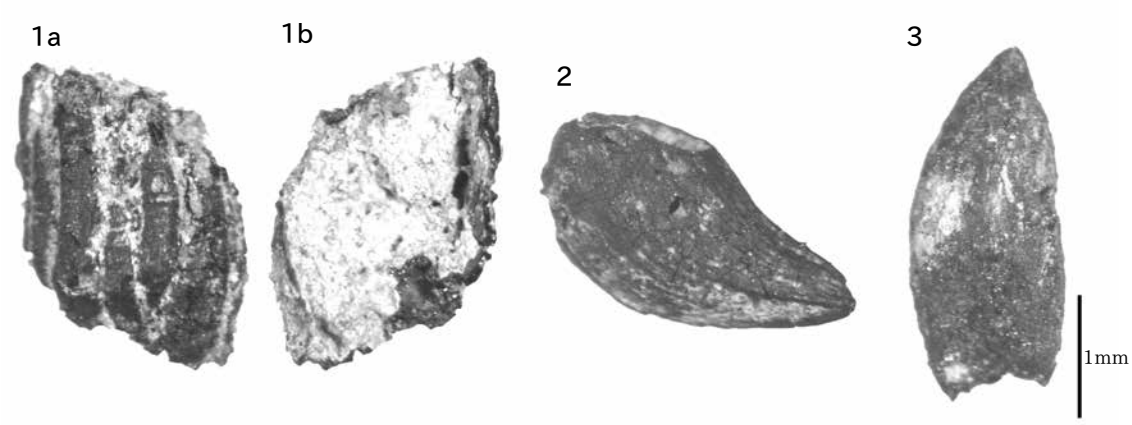
長さ2.8mm、幅1.1mm程度の円錐状。表面の状態が悪く、特徴が掴めない。種子以外にも分類群不明の芽の可能性もある。

E　考　　察

検出されたのは、ミズキ？、メナモミ、不明炭化種子？であった。ミズキは、落葉広葉樹であり、果実は主食に成り得るようなものではないが、生食可能な漿果である。本遺跡の試料は、ミズキと断定はできす、ミズキであったとしても利用された明確な根拠はない。しかし、ミズキ炭化核は、遺跡の住居址などから穀類と共にしばしば出土することから、何らかの形で利用されていたと考えられる分類群であり、本遺跡においても利用されていた可能性はある。メナモミは、ゴミ溜めなどの幾分乾き気味の場所に生育するキク科の雑草である。おそらく、土坑（SK001）付近に生育したメナモミの果実が紛れ込んだのではないだろうか。

F　お わ り に

縄文時代晩期前葉の土坑（SK001）より出土した炭化種実を検討した結果、ミズキが利用されていた可能性が考えられ、土坑付近にはメナモミが生育していたと予想された。



1．ミズキ？　炭化核（試料1）　2．メナモミ　炭化果実（試料2）3．不明　炭化種子（試料2）

第10図　出土した炭化種実

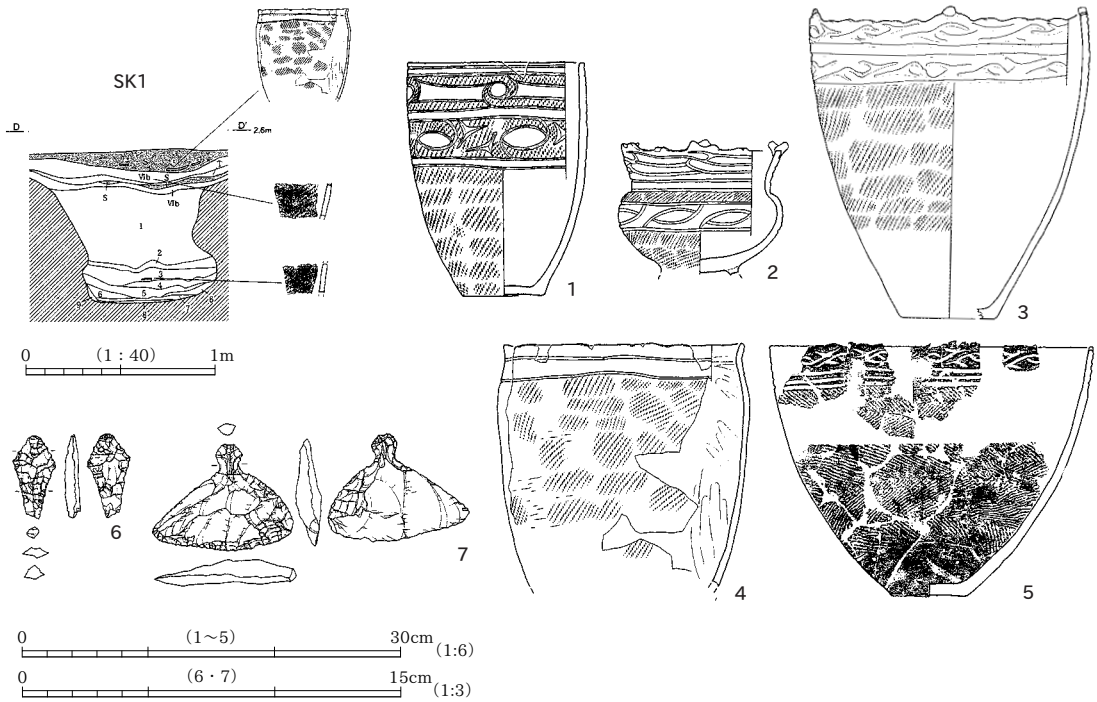
第Ⅶ章 ま　と　め

今回の調査では遺物・遺構の分布は限られていた。しかし、縄文時代晩期については次のような成果をあげることができたので、ここでまとめておきたい。

遺物集中ブロックから出土した土器は縄文晩期初頭の大洞B1式併行に比定される。新潟県内における当該期資料は、かつて「石倉式」と呼称されたこともあったがその実態は不明のままであり、実際の資料に即した検討が求められていると言えるだろう。出土遺物はほとんどが土器で構成されるが、小破片が多く、また最小個体数が60個体と決して多い出土量ではない。しかし、遺跡のなかの特定空間に分布し、その場で潰れたように出土した土器が比較的多かったことから、厳密な一括資料とは言えないまでも、それに準じる評価が与えられるのではないかと考えている。ここでは、縄文後期後葉・晩期前葉の土器が大量に出土した道端遺跡H14年調査区［渡邊ほか2003］との比較を通して、今回の調査成果をまとめてみよう。

1　縄文晩期前葉の土器

今回の調査区と250m程離れた地点にあたるH14年調査区（道端遺跡Ⅱ）では、縄文後期後葉と晩期前葉に帰属する土坑３基、ピット１基、遺物集中ブロック３か所、炭化物集中範囲７か所が確認された。なかでも、「遺物集中ブロック2」からは、大量の縄文晩期前葉の土器が出土した。第11図には、ブロック2から出土した主な遺構と遺物を掲載した。ブロックの主体を占めるのは3・5のような一群で、入組三



第11図　平成14年調査区　遺物集中ブロック2

叉文が独立し、単位文様化するのが最大の特徴である。報告にあたっては、仙台湾周辺と直接対比できる玉抱き三叉文（3）や、羊歯状文の祖形となるモチーフ（5）などの存在から、これらの一群を大洞B2式併行期に位置づけた［渡邊ほか2003］。3と5の間には型式学的な前後関係が推測できるが、他遺跡での検証を果たしていないことなどから細別は行っていない。また、1は1点だけ出土した大洞B1式で、文様要素において本書の図版4－5との対比が可能である。4は図版4－13と系統関係にある器種であろう。

今回の調査によって検出された土器群は、文様が三叉文を基調とすることから大洞B1式に比定され、H14年調査区の前段階に位置づけられる。羊歯状文が成立する大洞BC2式とH14年調査区資料の間を埋める段階の土器群として石船戸遺跡第Ⅲ群b類［渡邊1998］を位置づけると、大洞B1式（H16年調査区）→大洞B2式（H14年調査区）→大洞BC1式（石船戸遺跡第Ⅲ群b類）→大洞BC2式という変遷が追跡できる。今後は、これら土器群の組み合わせを一つの定点として、他遺跡との比較・検討が必要である。

今回の調査資料は、大枠においては大洞B1式として位置づけられるが、個別に見ていくと新旧の要素が垣間見える。遺物集中ブロック出土土器は、口縁部に「八」状の無文部を形成して、独立した三叉文を施文する器種（図版4－1～4）の他に、わずかではあるが、口縁部に半円状の縄文部を設けて、そこに玉抱き三叉文を施文するもの（9・10）が存在する。仙台湾周辺を中心とした縄文後期～晩期編年研究の成果［高柳1988a・b］に照らし合わせれば、1～4は大洞B1（古）式、9・10は大洞B1式（新）式にそれぞれ対比することができる。また13は、宮城県田柄貝塚第Ⅶ群土器に特徴的で、同遺跡では大洞B2式を構成する器種とされている。ブロック出土土器はわずかであり、一括性の保証もないことから、細別の可能性については判断を保留したい。新潟県における地域編年が確立されていない現段階ではむしろ、本土器群をひとつのまとまりとして捉え、他遺跡との検証を果たした後に再論すべきと考えている。今後の課題である。

2　道端遺跡の性格と遺跡群

H14年調査区では縄文晩期の土坑3基が検出され、多量の炭化物やサワグルミの破砕片を覆土中に含んでいた。また、建物跡が検出されない一方で炭化物集中範囲が数か所確認されており、何らかの作業場であった可能性が想定された。さらに、「遺物集中ブロック2」の石器組成は、石鏃2・石匙2・磨製石斧未成品1・磨石類2・石皿2と土器に比べて極めて少なかった。今年度調査でも建物跡は確認できず、遺構は土坑1基が検出されたに過ぎない。土坑覆土内から堅果類は出土しなかったが、埋没の過程で火が焚かれ、淡水魚類・哺乳類の焼骨が確認されている。炭化物集中範囲はやや不明瞭ながら認められ、石器は石鏃2・石錐1・石匙1・不定形石器2・磨石2とやはり少ない。検出遺構数において今年度調査区はH14年調査区より劣るが、土坑・炭化物集中範囲・ツールのみの石器組成という点では共通する。また、遺物集中ブロック出土土器が、細別可能であるにしろ、それほど大きな型式差を持たないことから、比較的短期間に形成された可能性が高い。以上のことから、調査範囲が限られていることもあり想像の域を出ないが、縄文時代における道端遺跡は拠点的な居住域というよりも、特定作業場としての性格が強かったと考えられる。土偶や石棒などの祭祀遺物・石器製作を示す剥片類の欠落などもその傍証となろう。また、2ヵ年にわたる調査によって、縄文後期後葉と晩期前葉の間で、活動の拠点が移動していることも判明した。遺跡の性格を明らかにするためにはいまだ材料不足であるが、遺跡間のネットワークを読み解くため

の一歩が踏み出せたものと捉えたい。

一方、第Ⅱ章１で触れたように、道端遺跡の周辺には縄文晩期の遺跡が比較的多く分布する。大洞BC式～C1式期の昼塚遺跡では掘立柱建物が検出され、土坑140基が発見された。また、道下遺跡では大洞B2式～BC式を出土し、埋設土器（埋甕）を検出した。野地遺跡は縄文後期中葉～晩期前葉の拠点集落と推測され、建物に伴う直径約30cmの柱根・埋設土器・堅果類の集積地点などが検出されている。特筆すべきは質量ともに優れた遺物群で、大量の土器・石器のほかに、漆製品、土偶、イノシシ・シカ・ウサギ・海獣・鳥類などの動物遺存体・クリ林の存在を示す大量の花粉化石などが発見されている。道下遺跡・野地遺跡ともに今後本調査が計画されており、その全容の解明が期待される。

これらの遺跡が半径5km圏内に存在することから、そこには有機的な関係が成立していたものと推測される。道端遺跡はそのようなネットワークのなかでこそ評価されるべきである。

要　　約

1　道端遺跡は、岩船郡荒川町大字南新保字蟹田地内に所在し、標高は3.2mを測る。

2　発掘調査は、国道113号荒川道路の建設に伴い平成16年度に実施した。調査面積は3,450m^{2}である。

3　遺跡は海岸砂丘と丘陵に挟まれた沖積低地に立地する。

4　発掘調査の結果、平安時代・古墳前期・弥生中期・縄文晩期の遺構や遺物を検出したが、主体は縄文晩期である。遺物包含層は縄文晩期のみが確認され、上層は削平されていた。

5　平安時代の遺物が川跡から出土した。須恵器無台杯の特徴から８世紀末に比定される。阿賀野川以北に特徴的な木葉痕ある砂底土器２点を確認した。

6　古墳前期の遺構は溝３条が検出され、それらは「コ」字状に配置された一連の遺構である可能性が高い。

7　縄文時代の遺構は、土坑１基・遺物集中ブロック１か所を検出した。遺物量はコンテナ８箱と少量であったが、縄文晩期前葉：大洞B1式にほぼ限定できる内容を有しており、一括遺物に準じるものと評価できる。

8　縄文時代の土坑から焼けた獣骨が検出された。分析の結果、アユ・コイ科・サケ科の淡水魚類のほか、大型・小型哺乳類の存在が明らかとなった。

9　H14年調査区と比較・検討した結果、道端遺跡は、縄文後期後葉～晩期前葉における非拠点的な特定作業場であった可能性が高まった。また、半径5km圏内に集落遺跡を含む縄文晩期の遺跡が集中することから、遺跡間ネットワークのなかで道端遺跡を評価すべきであると判断した。

引 用 文 献

石川智紀ほか 2002　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第112集　道端遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

川村浩司　2000　「上越市の古墳時代の土器様相―関川右岸下流域を中心に―」『上越市史研究』5　新潟県上越市

坂井秀弥ほか 1989　『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第53集　山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会

高柳圭一　1988a　「仙台湾周辺の縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけての編年動向」『古代』85　早稲田考古学会

高柳圭一　1988b　「宮城県金剛寺貝塚の再検討」『村上徹君追悼論文集』　村上徹君追悼論文集編集委員会

田辺早苗ほか 1991　『神林村埋蔵文化財報告 第３ 長松遺跡発掘調査報告書』神林村教育委員会

田辺早苗ほか 2001a　『神林村埋蔵文化財報告 第９ 衣田遺跡・道上遺跡』神林村教育委員会

田辺早苗ほか 2001b　『神林村埋蔵文化財報告 第10 城田遺跡』神林村教育委員会

新潟県　1983　『新潟県史 資料編１』原始・古代１　考古編

寺﨑裕助ほか 2004　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第135集 反貫目遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

水澤幸一　2002　『中条町埋蔵文化財調査報告　第24集　船戸川崎遺跡４次』中条町教育委員会

吉井雅勇　1993　『坂町宮ノ越Ｂ遺跡発掘調査報告書』荒川町教育委員会

吉井雅勇　2004　「荒川左岸」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会

渡邊裕之　1998　「新潟県水原町石船戸遺跡出土の縄文晩期前葉の土器群」『北越考古学』9　北越考古学会

渡邊裕之ほか 2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第129集 道端遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

土器観察表

胎土　雲：金雲母、石：石英、角：角閃石、海：海綿骨針、砂：砂粒、白：白色粒子

報告番号	種別	器形	グリッド	遺構	層位	法量（cm）			胎土	器面調整	使用痕跡	備考
						口径	器高	底径				
1	縄文土器	深鉢	5E-15・18・19・20、6E-5	ブロック	Ⅳ	23.00	-	-	雲 多い	外面：磨消縄文 内面：ナデ	内外面スス付着	
2	縄文土器		5E-24	ブロック	Ⅳ	-	-	-				
3	縄文土器	深鉢	4F-14	ブロック	Ⅳ	-	-	-	石・白	外面ミガキ	外面スス付着	
4	縄文土器	深鉢	5E-18	ブロック	Ⅳ	-	-	-				
5	縄文土器		5E-20・25、6E-20・21	ブロック	Ⅳ	-	-	-	白			
6	縄文土器	深鉢	7F-8	ブロック	Ⅳ							
7	縄文土器	深鉢	5E-23	ブロック	Ⅳ	-	-	-	雲・砂粒			
8a・b	縄文土器	深鉢	5E-14	ブロック	Ⅳ	-	-	-				
9	縄文土器	深鉢	5E-20	ブロック	Ⅳ	-	-	-	砂		内面スス付着	
10a・b	縄文土器	深鉢	4E-15・20、5E-1・8・11・16	ブロック	Ⅳ	-	-	-	砂	外面：ミガキ（摩耗） 内面：ナデ		
11	縄文土器	深鉢	5D-24	ブロック	Ⅳ	12.00	-	-	砂	外面：ミガキ 内面：ナデ	スス付着	
12	縄文土器	深鉢	5E-13・24、6F-23	ブロック	Ⅳ	-	-	-	角・白・長			内外器面荒れ著しい
13	縄文土器	台付鉢？	5E-19・20、6E-18・20・21	ブロック	Ⅳ	20.20	-	-	雲	内面：粗いナデ		
14	縄文土器	深鉢	5E-15	ブロック	Ⅳ	-	-	-	雲・砂	外面：ミガキ		
15	縄文土器	壺または注口土器	6E-19	SK001					雲	外面：ミガキ 内面：ナデ		
16	縄文土器	壺	5E-20	ブロック	Ⅳ	-	-	-	白			
17a・b	縄文土器	壺	5E-10	ブロック	Ⅳ							
18	縄文土器	台付鉢	5E-13	ブロック	Ⅳ	-	-	9.10	雲・砂	外面:ミガキ		
19	縄文土器	台付鉢	5E-25	ブロック	Ⅳ	-	-	7.10	砂・雲			
20	縄文土器	深鉢	6E-14・17、5E-15	ブロック	Ⅳ	30.00			海・砂	外面：RL 内面：ヘラナデ	黒斑あり	
21	縄文土器	深鉢	7E-19	ブロック	Ⅳ	-	-	-	雲・砂			
22	縄文土器	深鉢		ブロック	-	-	-	-	石・海・砂			
23a・b	縄文土器	深鉢	5E-15・20、6E-11・14	ブロック	Ⅳ				砂	外面：L 内面：ナデ		
24	縄文土器	深鉢	5E-18、5F-2・5	ブロック	Ⅳ	28.00			雲・砂	外面：LR縄文 内面：ナデ	スス付着	
25	縄文土器	深鉢	7E-8	ブロック	Ⅳ	-	-	-	石・雲・砂			
26	縄文土器	深鉢	5E-1	ブロック	Ⅴ	-	-	-	雲・砂			
27	縄文土器	深鉢	5E-19	ブロック	Ⅳ	-	-	-	雲・砂	内面：ナデ		
28	縄文土器	深鉢	5E-1・12・15・18・20、5F-8・9,7F-2	ブロック	Ⅳ	36.00						
29a・b	縄文土器	深鉢	5E-18・19・20	ブロック	Ⅳ	-	-	-	砂		外面スス付着	
30	縄文土器		5E-18	ブロック	Ⅳ	-	-	-	雲・砂	外面：LR横走 内面：ナデ	内面スス付着	
31	縄文土器	深鉢	6E-13・16	ブロック	Ⅳ	28.00			雲・砂	外面：結節LR 内面：ナデ	外面スス付着	
32	縄文土器	深鉢	5E-18	ブロック	Ⅳ	-	-	6.50	雲・白	外面:LR横走 内面:ナデ	オコゲ付着	
33	縄文土器	深鉢	5E-9・14	ブロック	Ⅳ	-	-	8.20	砂	表面劣化のため、調整ほとんど不明		
34	縄文土器		6E-13	ブロック	Ⅳ	-	-	8.40	砂	外面：ミガキ 内面：ナデ 底部：網３痕跡	内面オコゲ付着	
35	縄文土器	深鉢	5E-18	ブロック	Ⅳ				石・砂（φ２～3mm）	内面：ナデ		接合痕が明瞭
36	縄文土器	深鉢	5E-24	ブロック	Ⅳ	-	-	-	石・砂	内面：ナデ		
37	縄文土器	深鉢	8E-25	ブロック	Ⅳ	-	-	-	白・石	外面：ナデ		底部：網圧痕
38	縄文土器	深鉢	5F-5	ブロック	Ⅳ	-	-	-	細砂多量	縦位：ミガキ ヘラ工具明瞭		
39	縄文土器	深鉢	5E-8	ブロック	Ⅳ	-	-	7.00		外面被熱による劣化が激しい。調整未確認	スス付着	
40	縄文土器	深鉢	5E-19、6E-4・5	SX008		20.90	22.85	8.10	砂	外面：LR+結節 内面：ナデ 底部：アジロ→ケズリ（細かいもの）		
41	縄文土器	深鉢	6E-19・20	SK001		(11.35)	-	-	砂　細かく精良	外面:LR+RL 内面:ミガキ		
42	縄文土器	深鉢	6E-19	SK001	10	32.20	41.30	9.00	雲・砂			
58	土師器	高杯	9E-9	SX004	1	17.00	-	-		外面:ミガキ 内面:ハケ→ミガキ	外面に黒斑あり	
59	土師器	高杯	9E-9	SX004	1	-	-	-	砂　φ１～2mm多い	外面:ミガキ 内面:ナデ		

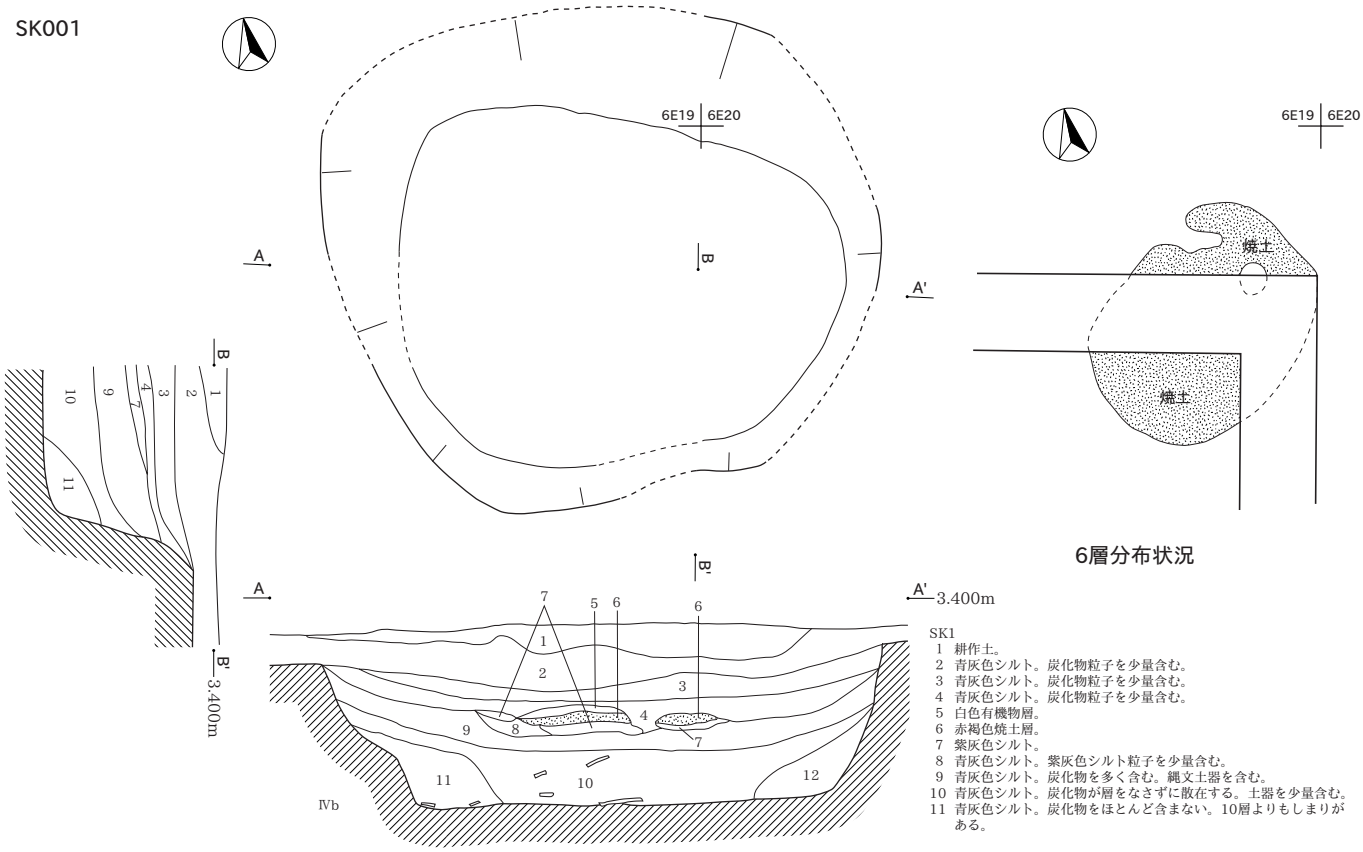
報告番号	種別	器形	グリッド	遺構	層位	法量（cm）			胎土	器面調整	使用痕跡	備考
						口径	器高	底径				
60	土師器	甕	9E-9	SX004	1	18.20			石・砂多	内外面:ハケメ		
61	土師器	無頸壺	9E-9	SX004	1	10.20	-	-		内外面:ハケメ		
62	土師器	甕	9E-12	SX004	1	18.20	-	-	石・砂	内外面:ハケメ	外面スス付着	
63	土師器	鉢	9E-4・9、9D-5	SX004	1	12.40	9・2	5.60		外面ハケメ、内面ナデ、底部ハケ?		
64	土師器	甕	9E-1・9・12、9D-5	SX004	1			6・9	砂　φ2～3mm多量	内外面:ハケメ		
65	土師器	甕	9E-9	SX004	1	-	-	5.80	石・砂φ2～7mm	外面ハケメ、内面ナデ		
66	須恵器	無台杯	9D-14	SX005	Ⅱ	14.00	3.95	10.50	石	内外面:ロクロナデ　底部:ヘラ切り		酸化炎焼成
67	須恵器	無台杯	9D-9	SX005	Ⅱ	13.00	3.50	8.00	石・砂	内外面:ロクロナデ　底部:ヘラ切り		酸化炎焼成
68	須恵器	無台杯	9D-6	SX005	Ⅱ	12.60	3.40	8.40	石・砂	内外面:ロクロナデ　底部:ヘラ切り		酸化炎焼成
69	須恵器	無台杯	8D-14	SX005	Ⅱ	12.40	3.20	8.40	石	内外面:ロクロナデ　底部:ヘラ切り		酸化炎焼成
70	須恵器	無台杯	9D-14	SX005	Ⅱ	13.00	3.70	8.00	石	内外面:ロクロナデ　底部:ヘラ切り		酸化炎焼成
71	須恵器	無台杯	9D-4・14・15	SX005	Ⅱ	12.40	3.30	7.00	石・白φ3mm			墨書：「称」　還元炎焼成
72	須恵器	無台杯	8D-14	SX005	Ⅱ	12.60	2.70	9.00	石	内外面:ロクロナデ　底部:ヘラ切り→ケズリ		還元炎焼成
73	須恵器	有台杯	9D-14	SX005	Ⅱ	12.20	3.95	8.30	石・長・白	内外面:ロクロナデ　底部:ヘラ切り		酸化炎焼成
74	須恵器	有台杯	8D-6	SX005	Ⅱ	-	-	10.10				還元炎焼成
75	土師器	甕	9C-24、9D-14	SX005	Ⅱ	24.50	-	-	雲・砂	内外面:ハケメ		
76	土師器	甕	9D-3・12～15	SX005	Ⅱ	24.50	(32.9)	10.20	石・白・砂（φ1～2mm）	外面：ケズリ（縦位：下から上）　内面：ハケ		
77	土師器	甕	9D-14	SX005	Ⅱ	17.60	-	-	砂	内外面:ハケメ	外面オコゲ付着	
78	土師器	甕	9D-13・14・19	SX005	Ⅱ	15.3	-	-	雲・海・砂	内外面:ハケメ		
79	土師器	甕	9D-14	SX005	Ⅱ	-	-	9.30	石・砂	内外面:ハケメ　底部:木葉痕		砂底土器
80	土師器	甕	8D-6	SX005	Ⅱ	-	-	10.30	石・砂			砂底土器
81	土師器	甕	8E-17・22	SX005・006	Ⅱ	-	-	3.20		外面：上部ハケメ，下部ケズリ 内面：ハケメ・ナデ 底部：ケズリ	内面スス付着	
82	土師器	甕	9D-14	SX005	Ⅱ	-	-	6.55	砂　φ3～4mm多	外面:ハケ　内面:板状工具によるナデ		底部黒斑
83	土師器	甕	9D-12	SX005	Ⅱ	-	-	2.60	砂　φ2mm多	外面:ハケメ　内面:ハケメ		
84	須恵器	甕	9D-14	SX005	Ⅱ	-	-	-	白・砂	外面：叩き　内面：当て具		酸化炎焼成
85	須恵器	甕	7D-20、7E-5、7F-8、8C-21、8D-6・22・24、9C-23、9D-9・10・13・15～21、9E-20、10D-11	SX005	Ⅱ	24.00	-	-				
87	弥生土器	甕	7D-3	SX005	Ⅱ	-	-	-	砂（φ2～3mm）	内外面：ハケメ	外面スス多い	
88	弥生土器	深鉢	7E-2、8E-17・22	SX005・006	Ⅱ	-	-	-				口縁：波状文 胴部：無節縄文
89	弥生土器	甕	7D-3	SX005	Ⅱ	-	-	7.80	砂（φ5mm大粒）	外面:ハケメ	表面摩耗が激しい	穿孔、新しい?
90	土師器	甕	8D-14・15、9D-14・18	SX002・005		-	-	8.65	砂多量	内外面:ハケメ　底部:一部ハケメ		同一個体共有
91	弥生土器	鉢or蓋	8F-13	SX006	Ⅱ					外面：充填縄文　内面：ハケメ	スス付着	8F11 Ⅱ（48と同一）
92	縄文土器	深鉢	8F-7	SX006	Ⅱ	-	-	8.40	砂	外面：ケズリ　内面：ナデ　底部：笹圧痕	外面スス	底部：笹圧痕
93	土師器	甕	9D-12		Ⅱ	16.00			石・砂φ2～3mm			
94	土師器	甕	9D-8		Ⅱ	14.00	-	-	砂			
95	土師器	甕	9D-14		Ⅱ	(14.5)	-	-	砂	内外面：ロクロナデ	スス付着	
96	土師器	甕	10D-11		Ⅱ				雲・海・砂φ2mm多	内外面:ハケメ		
97	土師器	甕	9B-8、9D-8		Ⅱ・Ⅱ	-	-	7.80			外面スス	
98a・b	土師器	甕	9D-8・13		Ⅱ・Ⅳ			8.00	雲・砂			輪積痕を残す
99	土師器		10E-25		Ⅱ	-	-	6.40	白・砂		器面凹凸	疑口縁を表現
100	珠洲	甕	5E-8		Ⅰ	-	-	-		外面：叩き　内面：なし		

石器・土製品観察表

報告番号	器種	大グリッド	遺構	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	材質	備考
43	石鏃	5D-18	ブロック	Ⅳ	28.0	1.0	3.7	1.06	チャート	基部にピッチ付着
44	石鏃	7E-18		Ⅳ	21.5	12.0	6.0	1.55	流紋岩	
45	石鏃	6E-1		Ⅳ	20.4	10.5	4.7	0.98	半透明頁岩	
46	石鏃	6E-20		Ⅳ	29.0	15.6	3.8	1.84	頁岩	基部にピッチ付着
47	石鏃	6E-4	SX008		30.3	11.5	5.6	1.48	鉄石英	飛行機鏃
48	石鏃	5F-4	ブロック	Ⅳ	59.0	15.2	5.0	3.52	凝灰岩	基部にピッチ付着
49	石匙	5E-25	ブロック	Ⅳ	56.0	65.0	13.0	30.66	頁岩	基部にピッチ付着
50	石匙	6E-1			56.0	65.8	10.5	26.01	凝灰岩	
51	不定形石器	5E-15	ブロック	Ⅳ	49.5	63.0	14.0	35.67	頁岩	
52	石核	6E-7		Ⅳ	34.0	63.0	16.5	34.94	流紋岩	
53	不定形石器	5E-24	ブロック		50.0	83.0	18.0	50.47	頁岩	
54	石錐	6E-1		Ⅳ	55.0	28.0	10.0	7.87	頁岩	
55	石錐	5E-25	ブロック	Ⅳ	60.0	27.0	12.0	9.96	頁岩	
56	磨石	5E-18		Ⅳ	74.0	67.0	50.0		花崗岩	
57	磨石	5E-20		Ⅳ	95.0	60.0	40.0		花崗岩	側面に明瞭な平坦面形成
86	土錘	10D-22	SX005	Ⅱ	50.0	31.5	31.5		土製	

図　　版

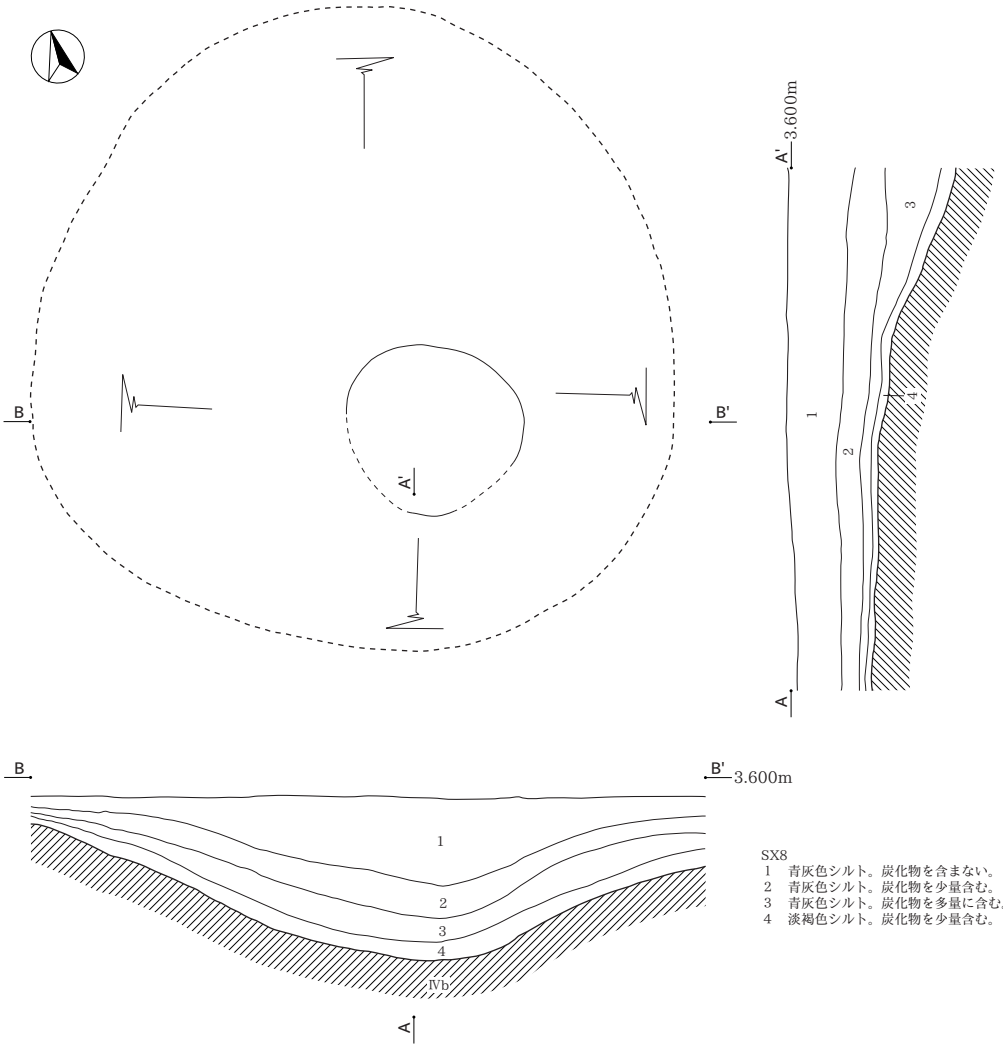
SK001



SK1
1 耕作土。
2 青灰色シルト。炭化物粒子を少量含む。
3 青灰色シルト。炭化物粒子を少量含む。
4 青灰色シルト。炭化物粒子を少量含む。
5 白色有機物層。
6 赤褐色焼土層。
7 紫灰色シルト。
8 青灰色シルト。紫灰色シルト粒子を少量含む。
9 青灰色シルト。炭化物を多く含む。縄文土器を含む。
10 青灰色シルト。炭化物が層をなさずに散在する。土器を少量含む。
11 青灰色シルト。炭化物をほとんど含まない。10層よりもしまりがある。

0　(1：30)　1m

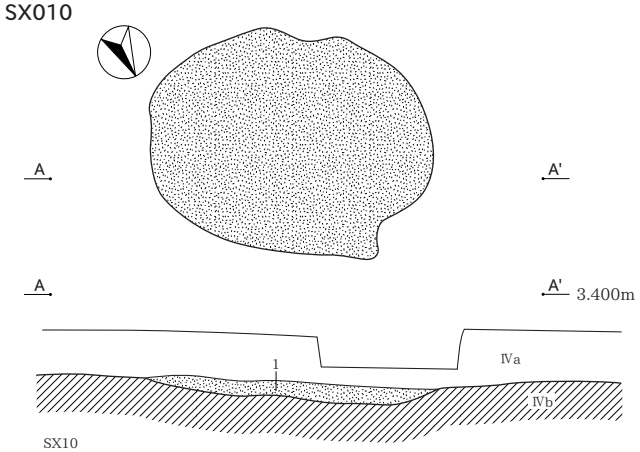
SX008



SX8
1　青灰色シルト。炭化物を含まない。
2　青灰色シルト。炭化物を少量含む。
3　青灰色シルト。炭化物を多量に含む。
4　淡褐色シルト。炭化物を少量含む。

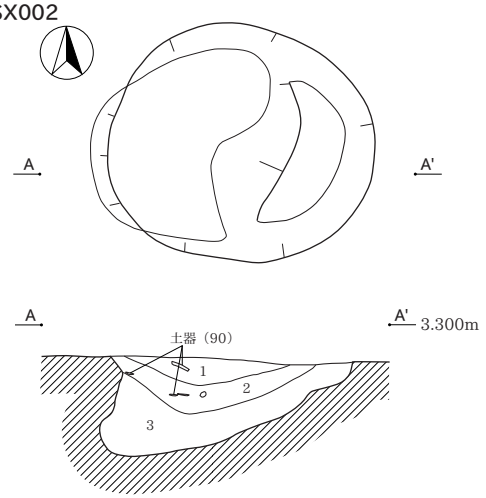
0　(1：30)　1m

SX010



SX10
1　赤褐色焼土層。炭化物を含む。

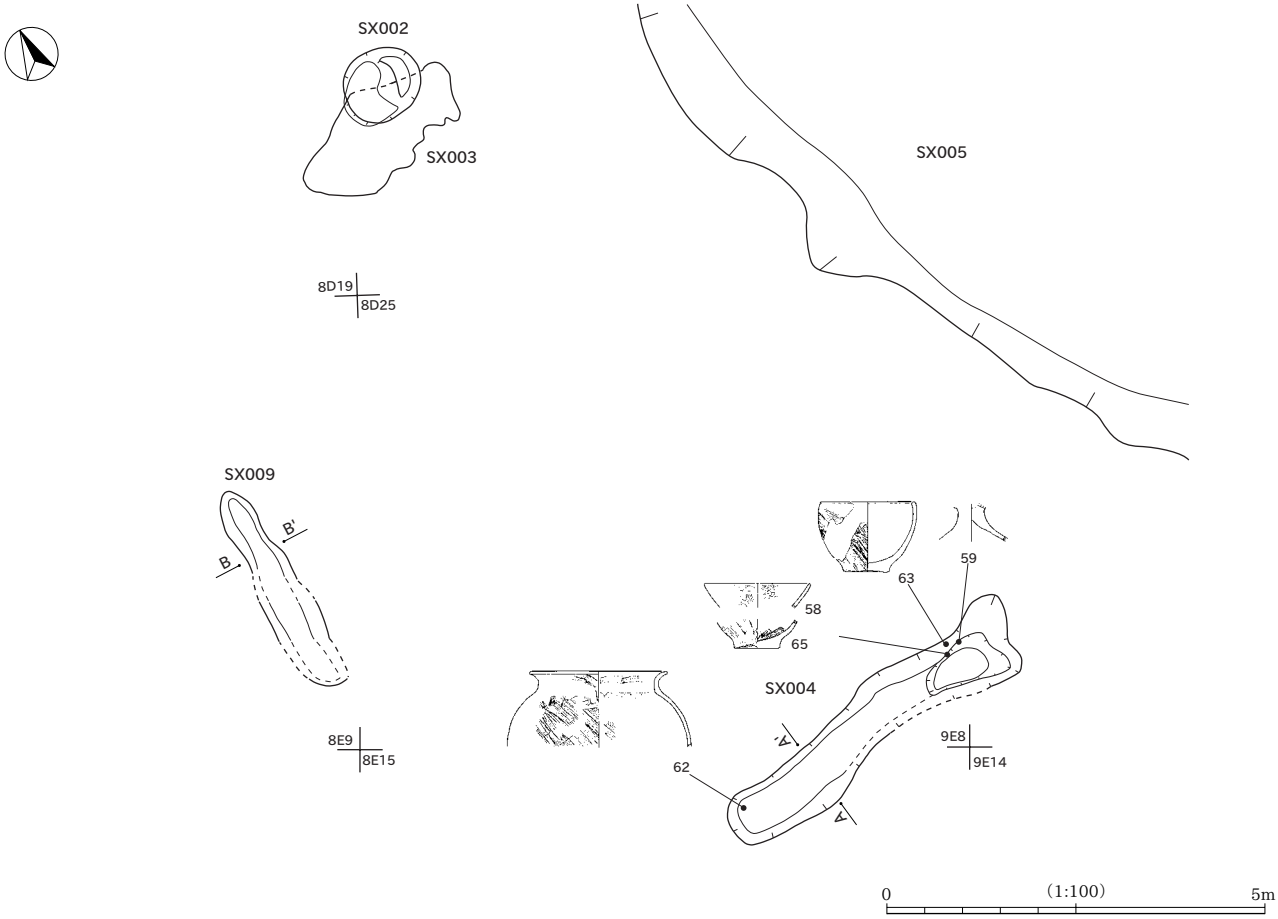
SX002

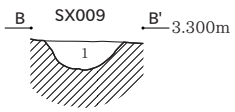


SX002
1　暗赤褐色腐植土。炭化物粒子と木片などの有機物を多く含む。上部では青灰色シルトがマーブル状に混入する。
2　赤褐色腐植土。木片などの有機物を多く含む。
3　暗青灰色シルト。Ⅳ層を基調としてⅡ層が薄く層状に混入する。

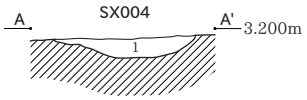
0　（1：30）　1m

SX003・SX004・SX009



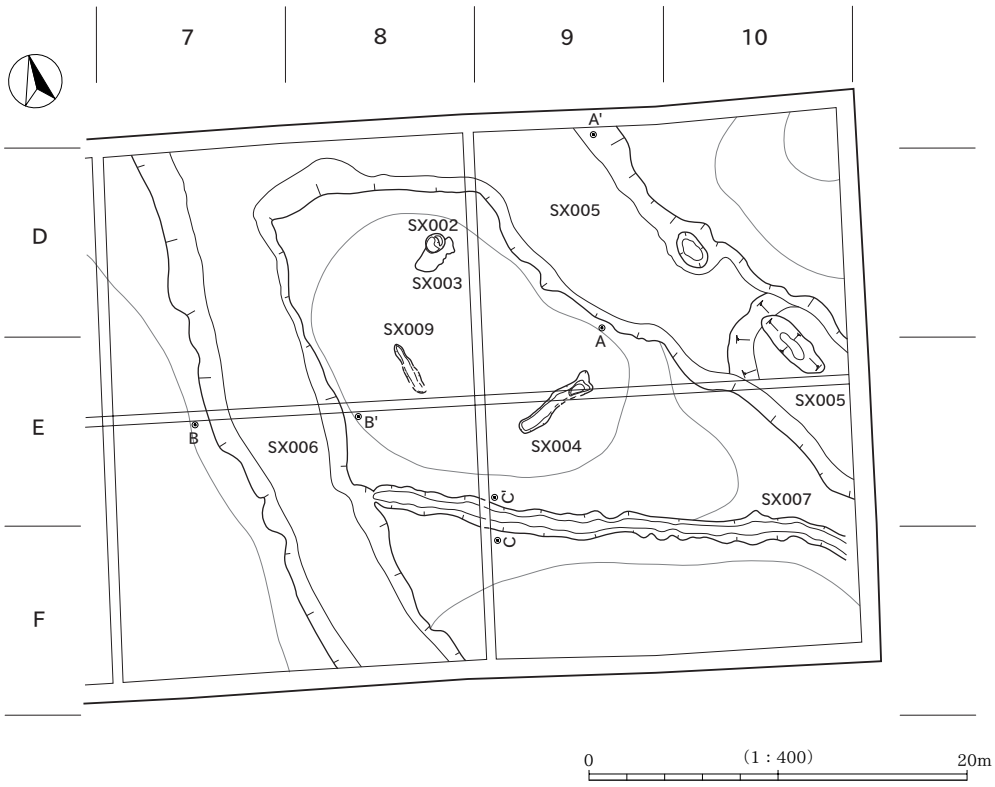


SX009
1　暗灰色粘質土。しまりなし、粘性強い。炭化物は含まない。

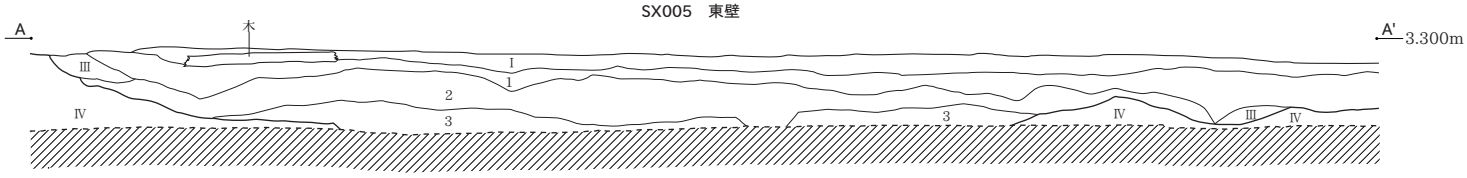


SX004
1　灰褐色粘質土。しまりなし、粘性強い。やや黄色味がかる。

0　（1：30）　1m



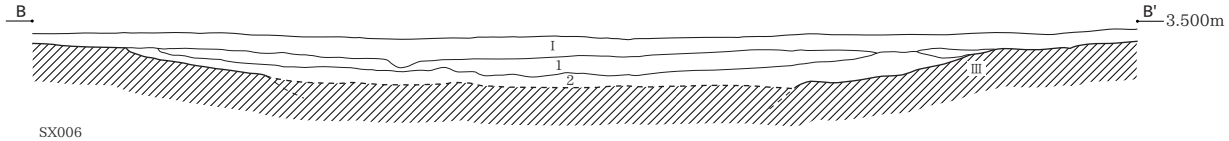
SX005　東壁



SX005
1　赤褐色腐植土。Ⅱ層に相当。層下部に白色粗砂をブロック状に含む。
2　白色砂質土。腐植土がマーブル状に混入する。
3　明青灰色シルト。Ⅳ層に褐色腐植土がマーブル状に混入する。

0　(1：60)　2m

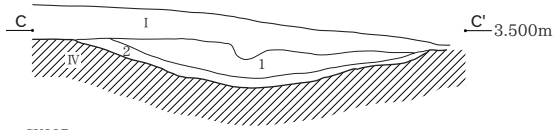
SX006　南壁



SX006
1　赤褐色腐植土。Ⅱ層に相当。
2　淡褐色腐植土。1層よりも明るい。

0　(1：60)　2m

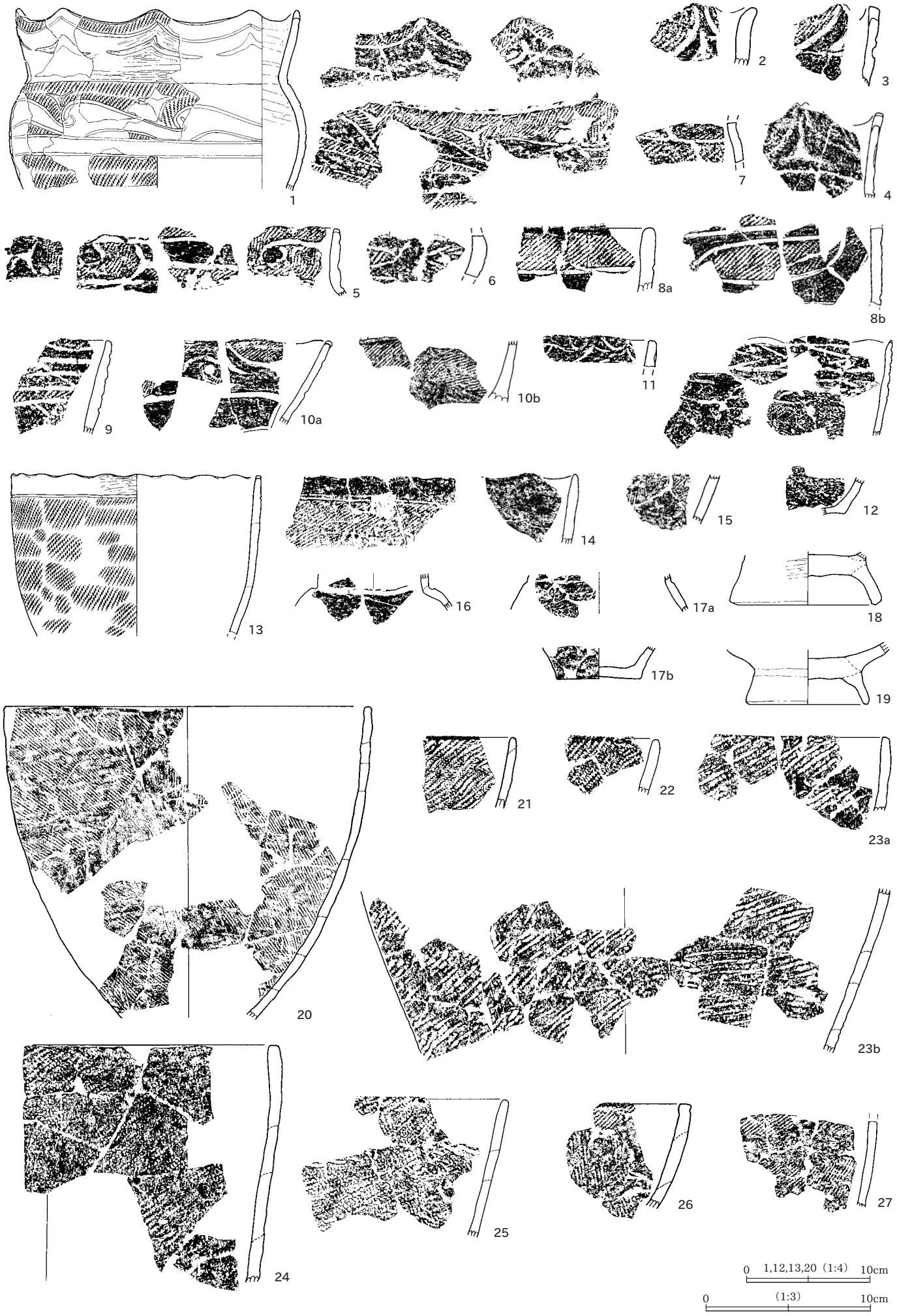
SX007　東壁



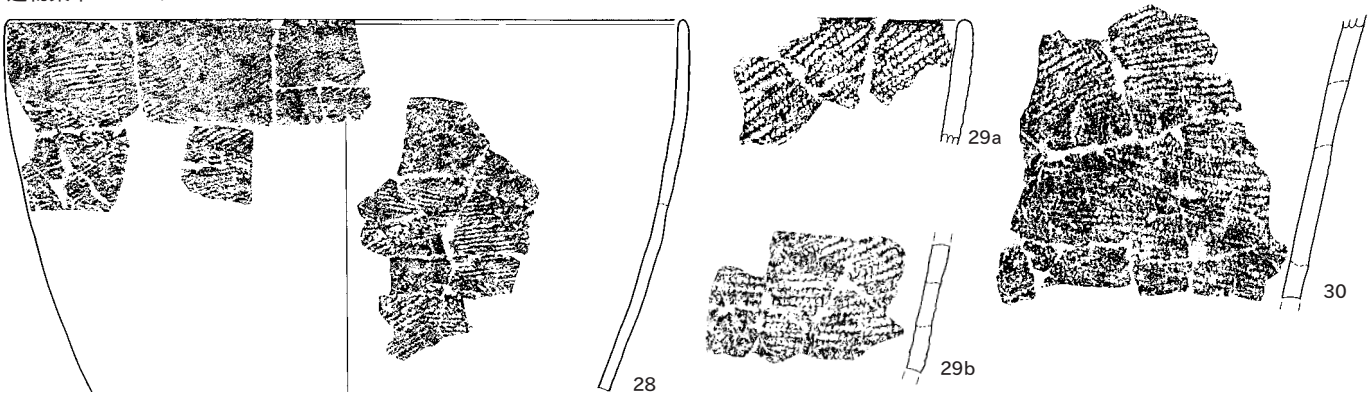
SX007
1　赤褐色腐植土。Ⅱ層に相当。
2　淡褐色腐植土。1層よりも明るい。

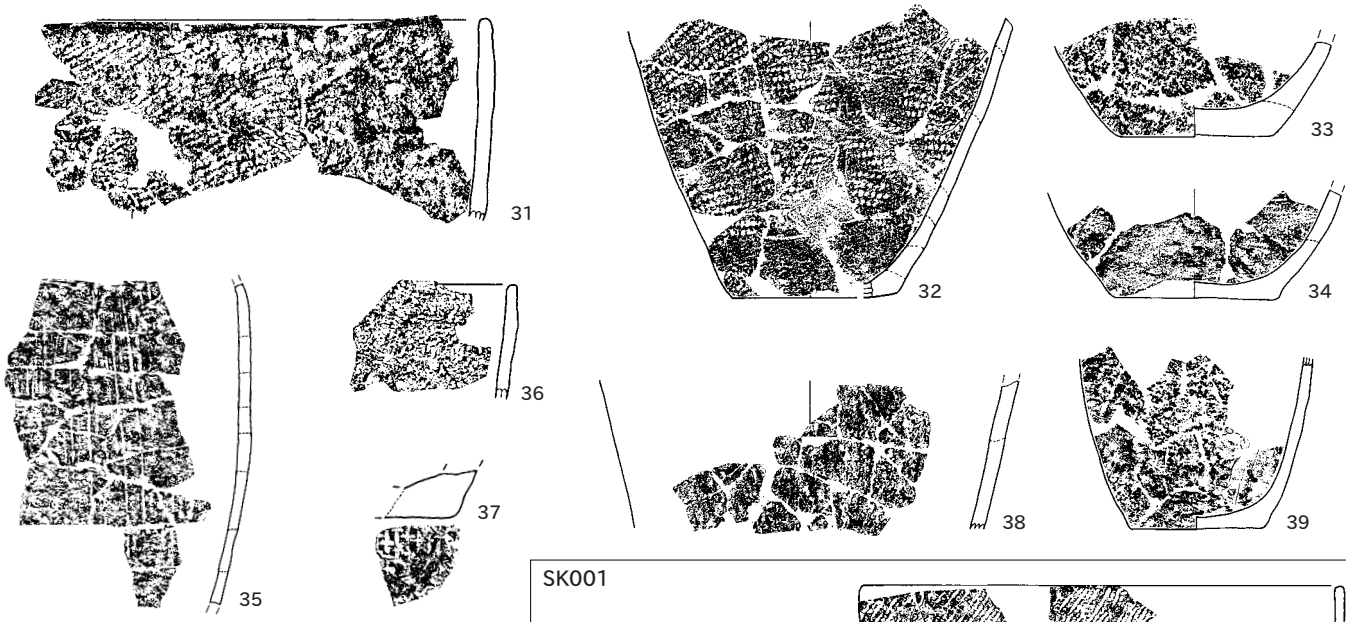
0　(1：60)　2m

遺物集中ブロック

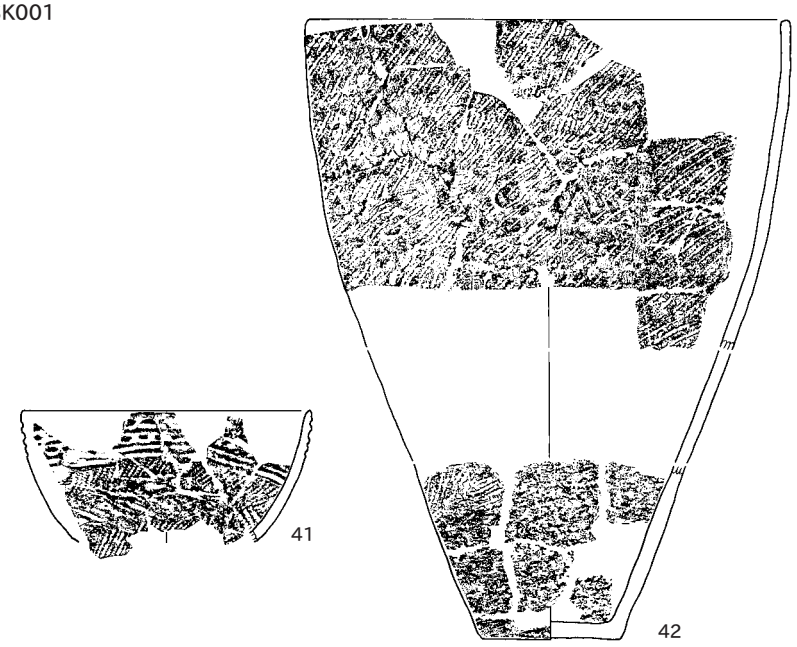

1
2
3
4
5
6
7
8a
8b
9
10a
10b
11
12
13
14
15
16
17a
17b
18
19
20
21
22
23a
23b
24
25
26
27
0 1,12,13,20（1:4） 10cm
0 （1:3） 10cm

遺物集中ブロック

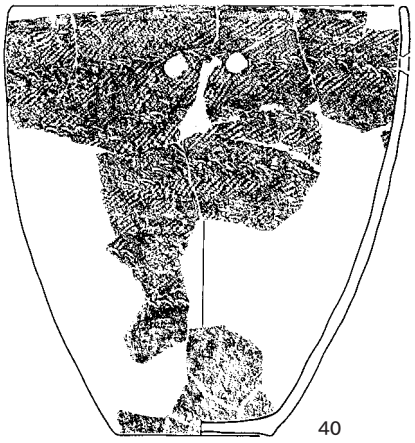


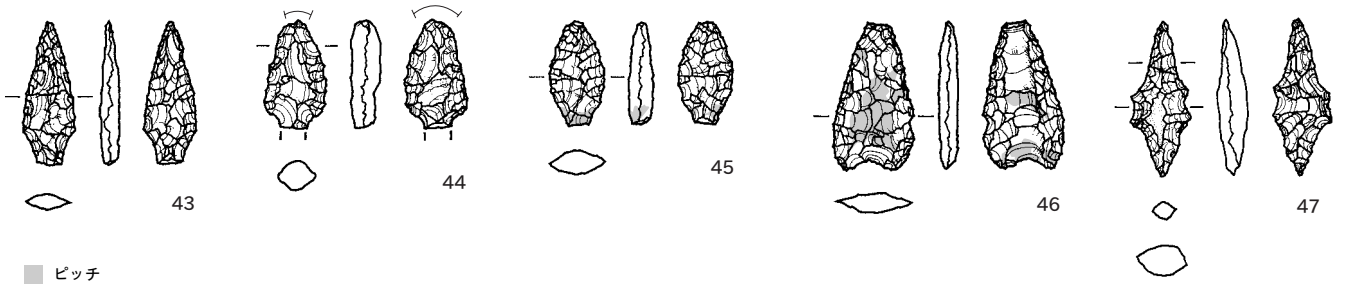


SK001



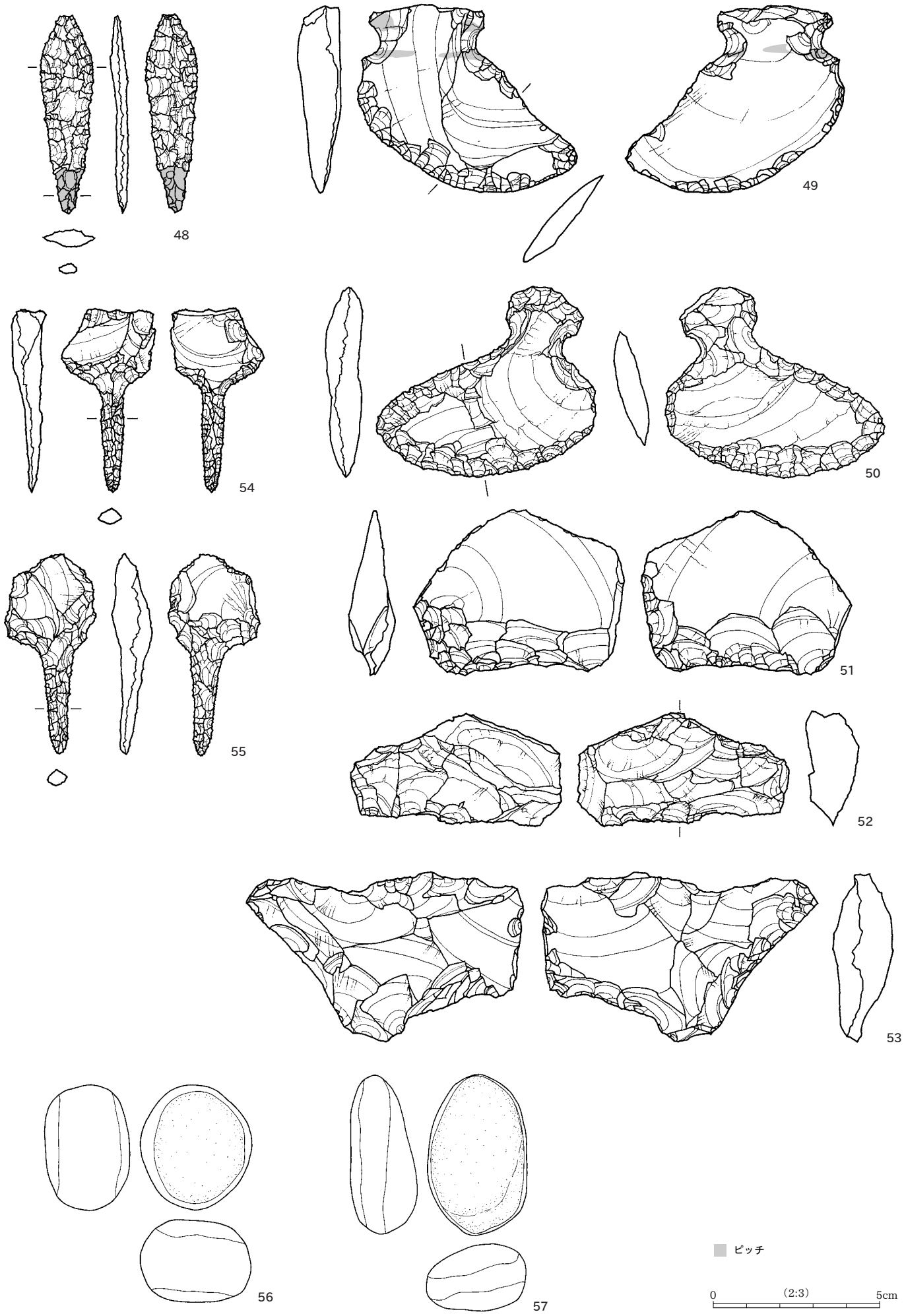
SX008



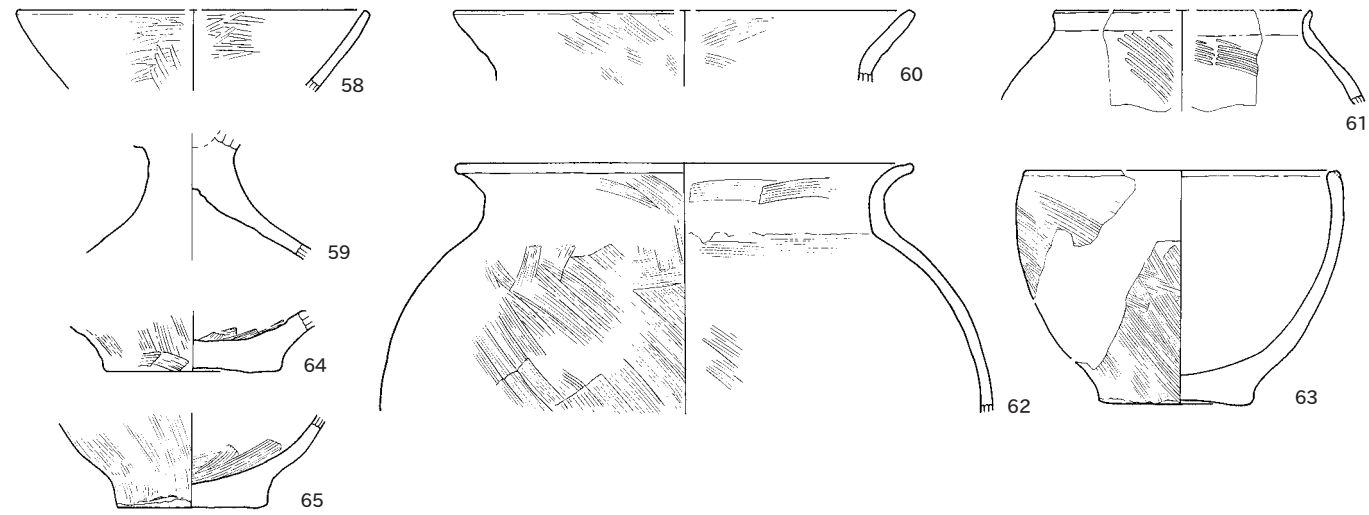


ピッチ
摩滅

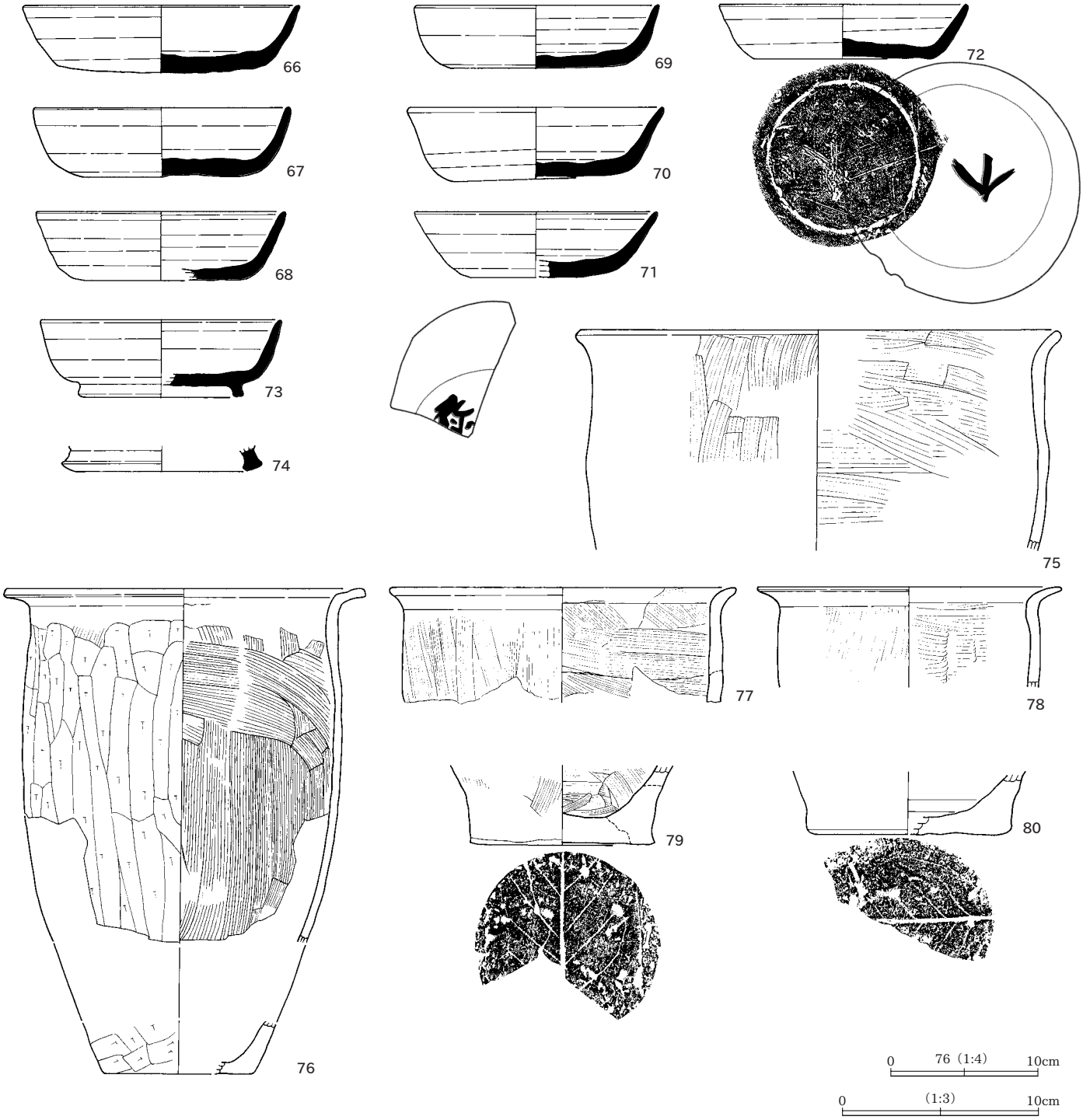
0 (1:3) 10cm　28,33～35,38～40 0 (1:4) 10cm　0 42 (1:5) 10cm　0 43～47 (2:3) 5cm

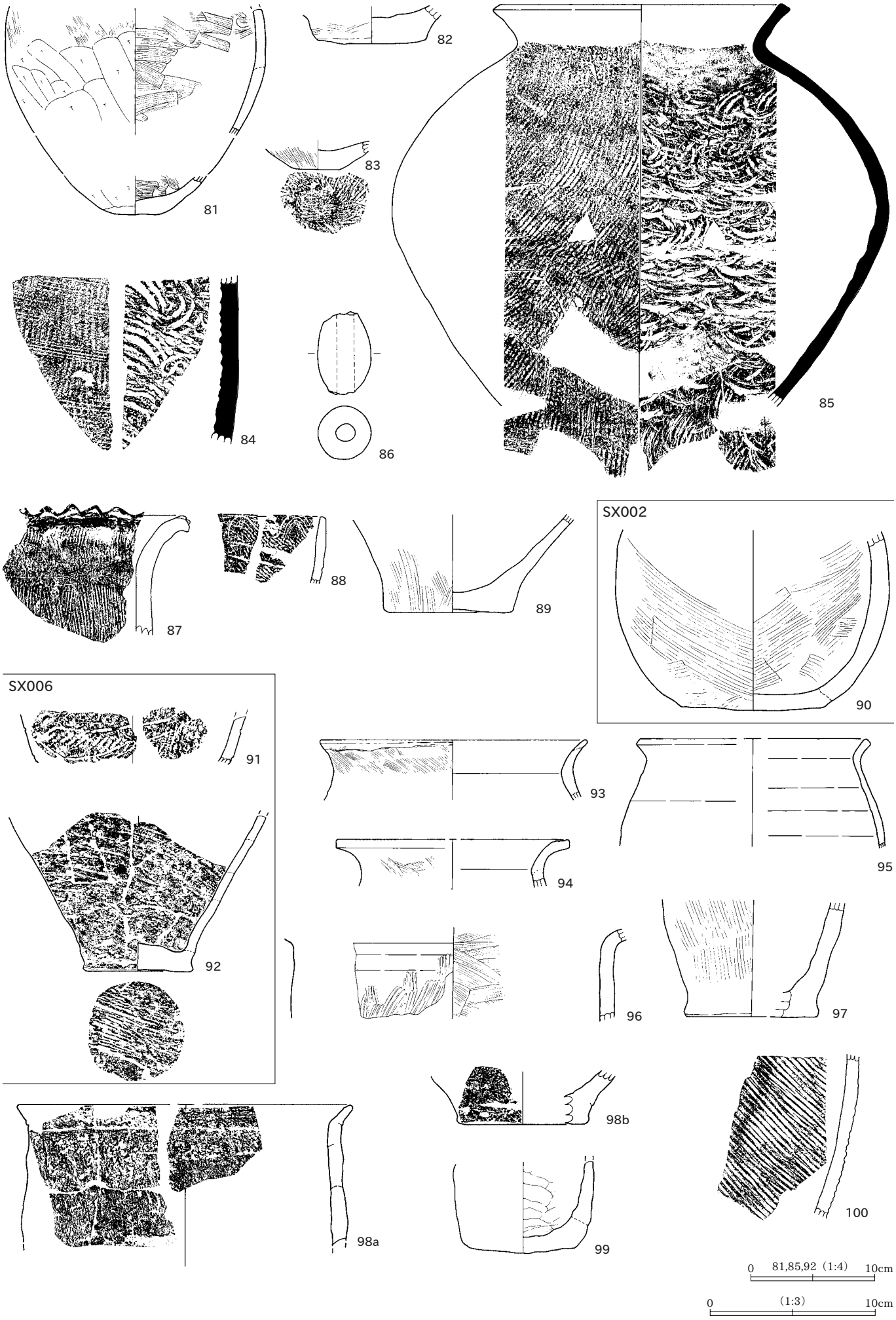

48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
ピッチ
0 (2:3) 5cm
0 56,57 (1:3) 10cm

SX004


58
60
61
59
62
63
64
65

SX005


66
69
72
67
70
68
71
73
74
75
76
77
78
79
80
0 76（1:4） 10cm
0 （1:3） 10cm

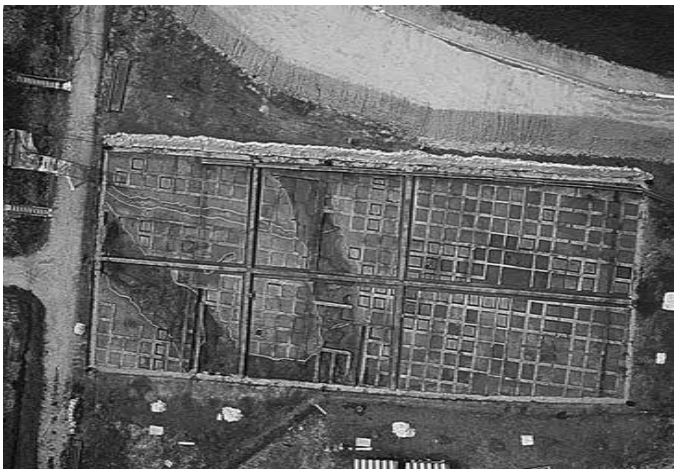

81
82
83
84
85
86
87
88
89
SX002
90
SX006
91
92
93
94
95
96
97
98a
98b
99
100
0 81,85,92（1:4） 10cm
0 （1:3） 10cm

SK001 セクション　南西から

SK001　焼土検出状況　東から

遺跡近景　南西から

遺跡近景　南東から

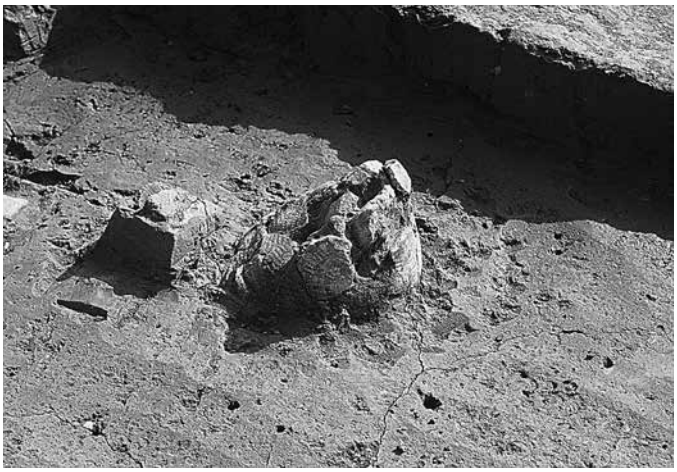


遺跡近景

表土除去作業

遺物集中ブロック（５Ｅグリッド）　南から

遺物集中ブロック（５Ｅグリッド）　西から



遺物出土状況（５Ｅグリッド）　北西から

5E20 グリッドセクション　西から

炭化物出土状況（6E19 グリッド）　西から

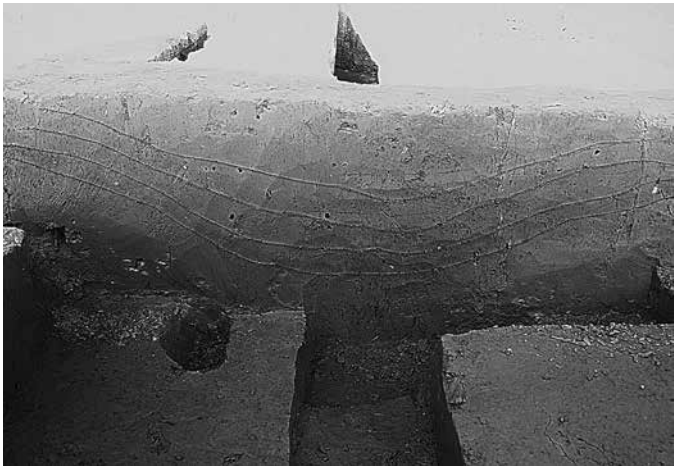
サブトレンチ掘削　西から

SK001 検出状況（６ E19 グリッド）　南から

SK001 セクション　南から

SK001 完掘　南から

SX008 検出状況（６ E ５ グリッド）　東から

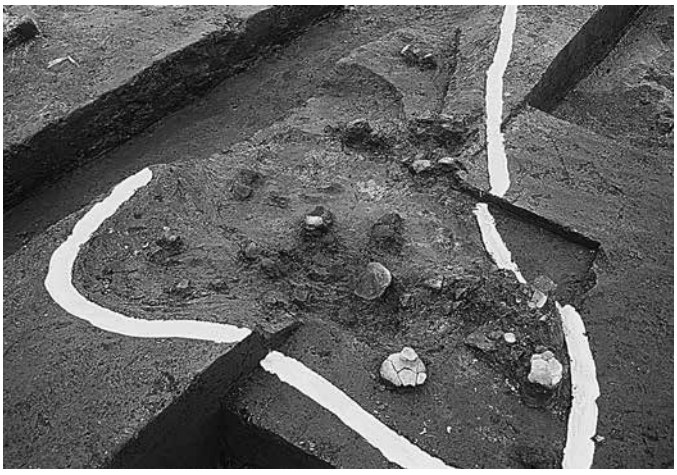


SX008 南壁セクション　南から

SX010 セクション　北から

SX010 検出状況（特に焼土が濃厚なところ）

SX004 遺物出土状況　南から



SX004 遺物出土状況　東から

SX004 セクション　東から

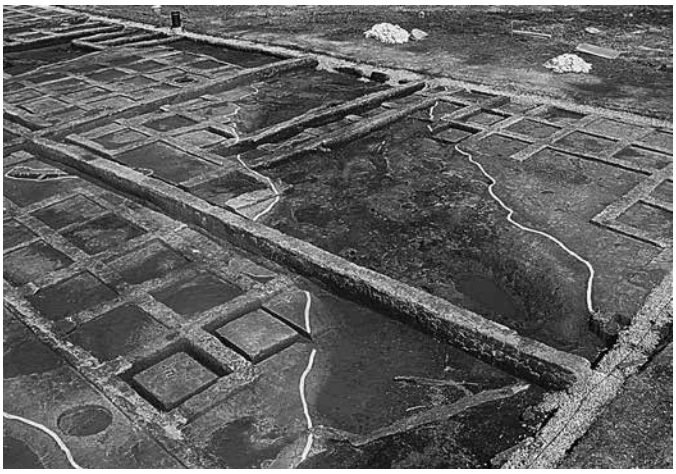
SX004 炭化物出土状況　南から

SX009 完掘　東から

SX002・003 検出状況　西から

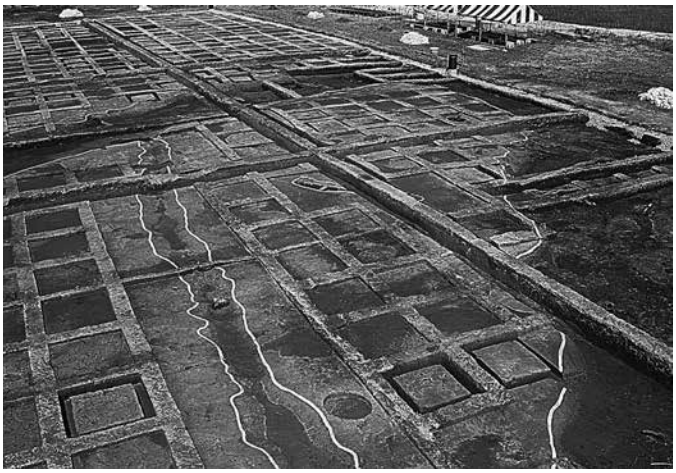
SX003・004・009 完掘　東から

SX002 完掘　南から



SX005 完掘　東から

SX005 遺物検出状況　西から



SX006・007 完掘　東から

SX005 セクション　南西から

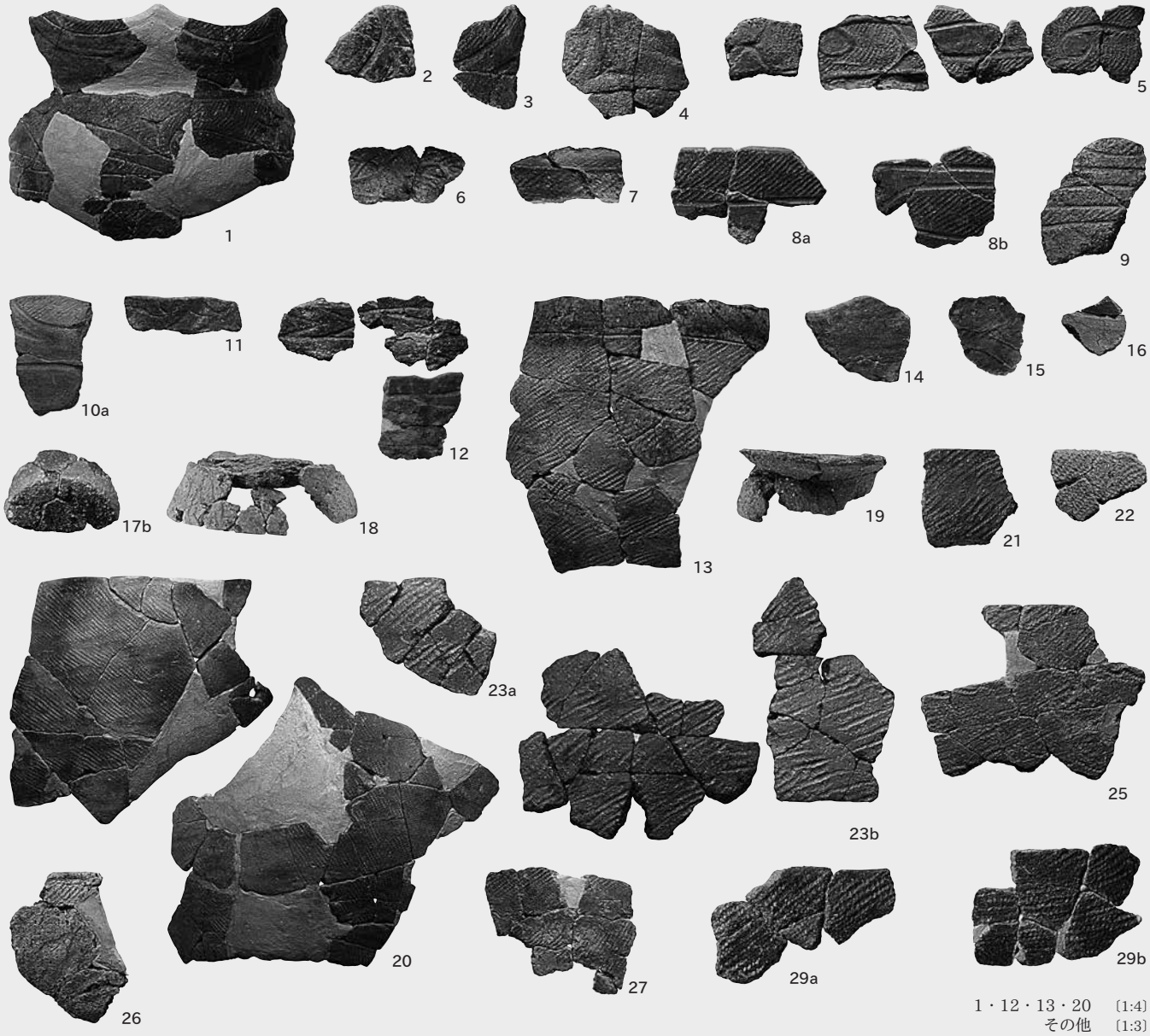
SX006 セクション　南西から

作業風景

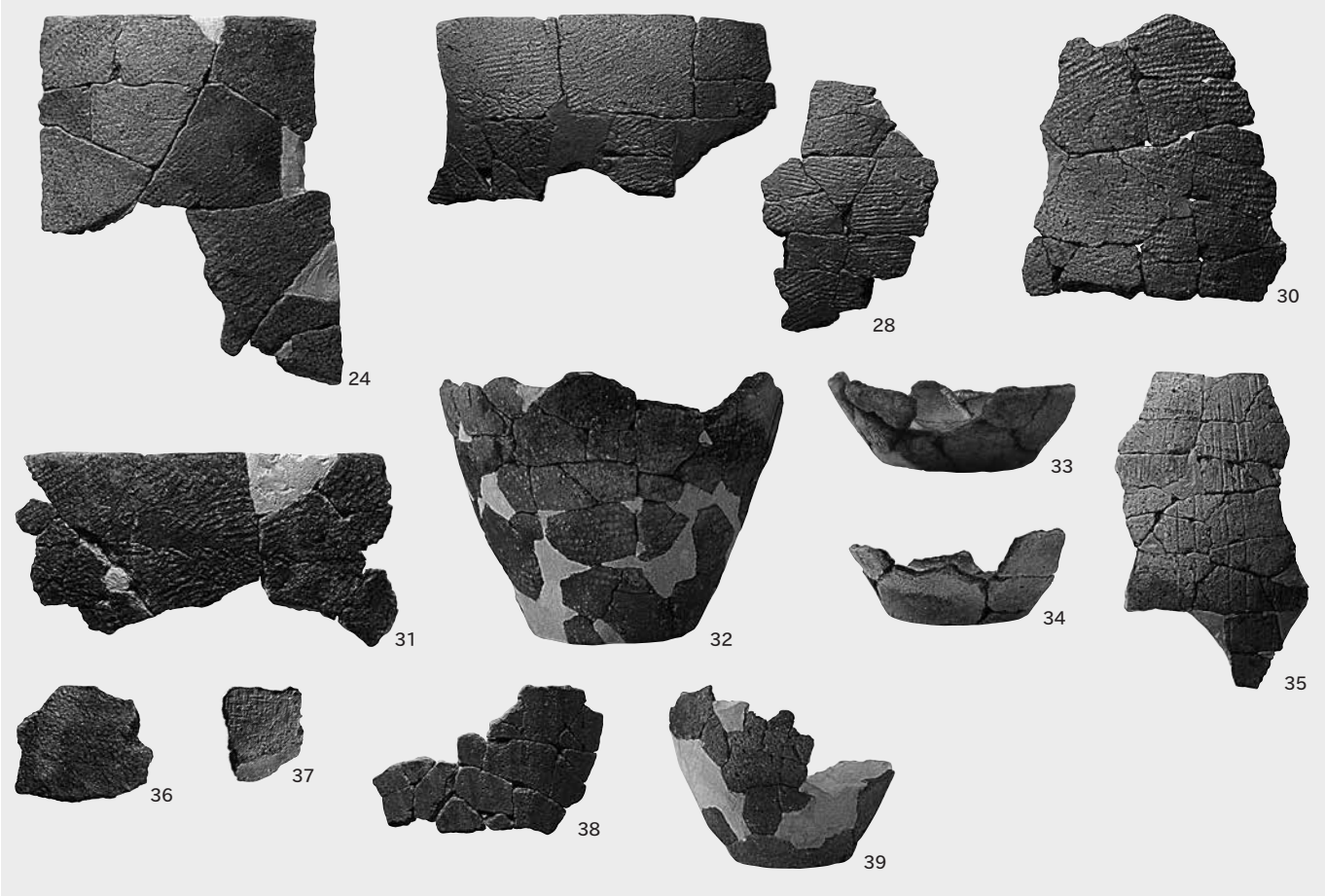
試掘で検出された SX005（8C～10C グリッド）　東から

出土石器集合写真

遺物集中ブロック

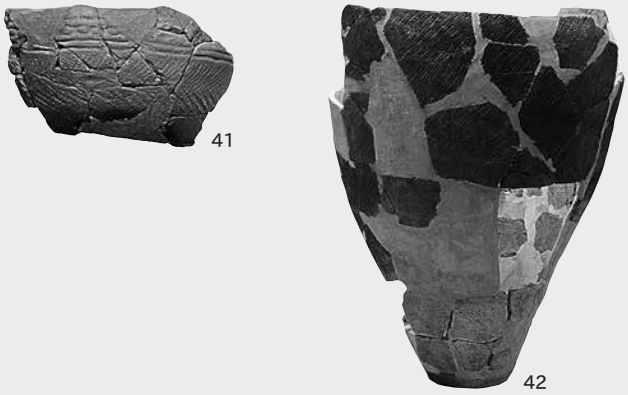


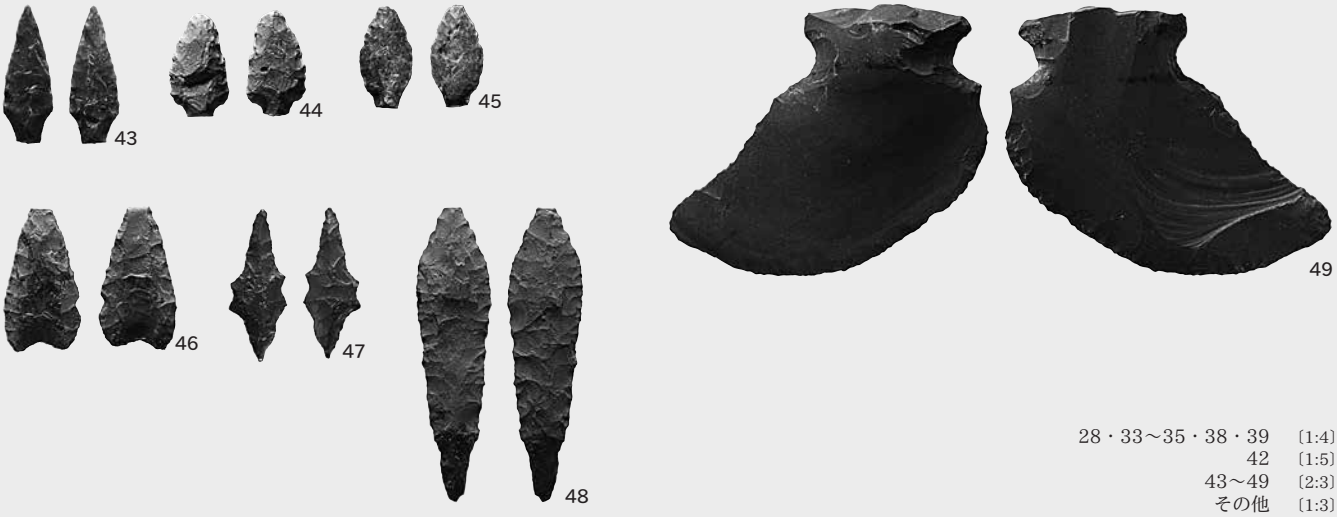
1・12・13・20　〔1:4〕
その他　〔1:3〕



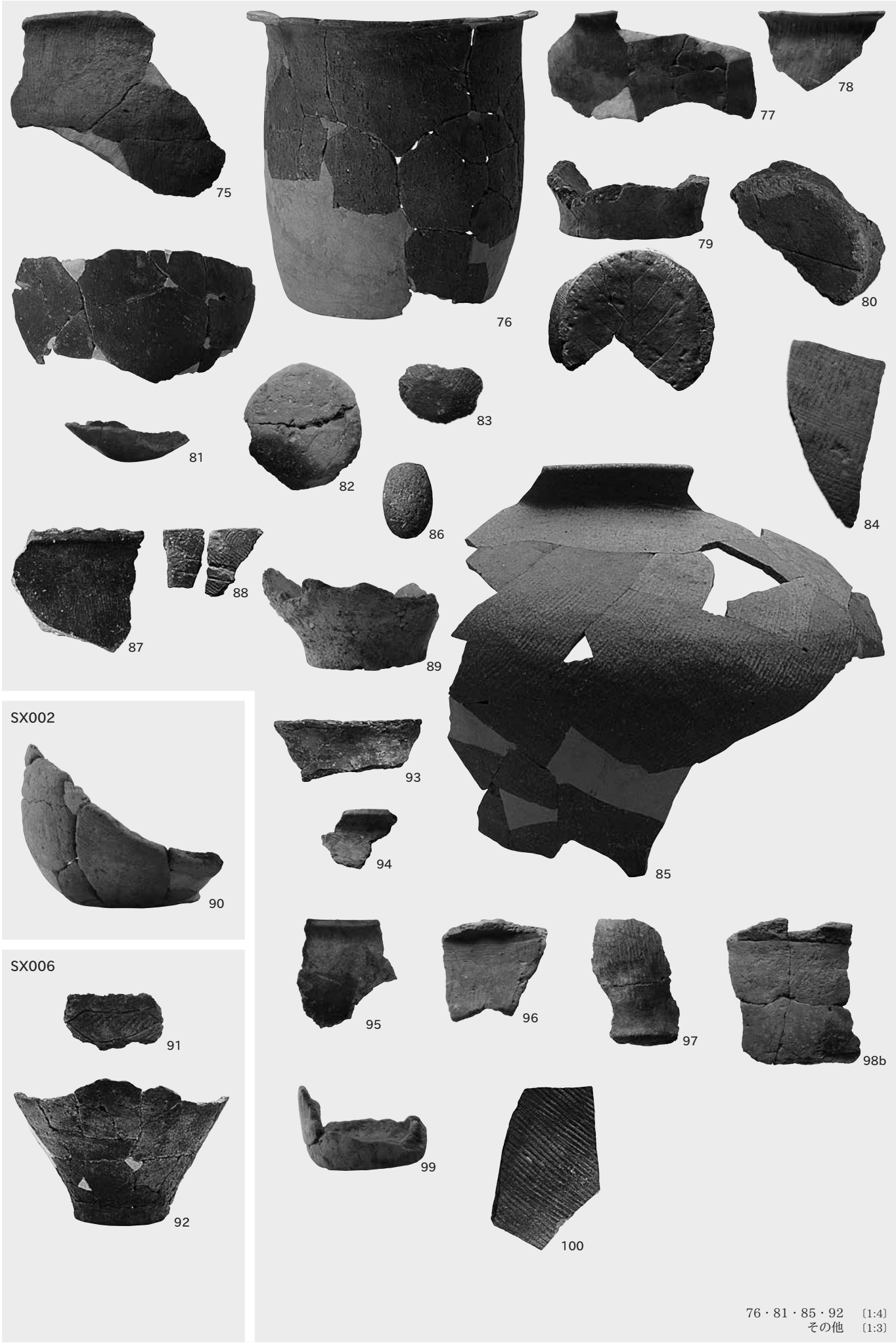
SX008

SK001

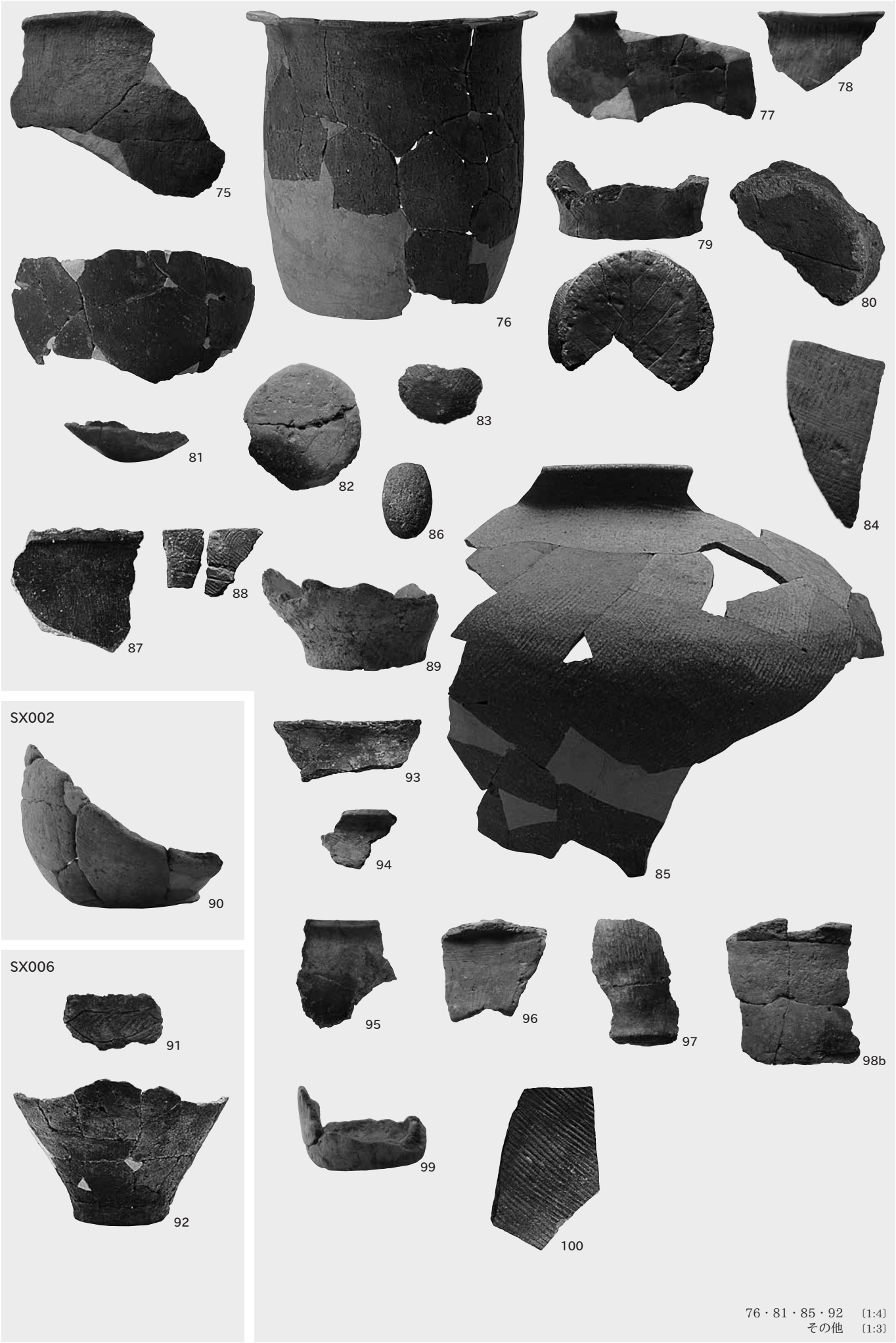




28・33～35・38・39　〔1:4〕
42　〔1:5〕
43～49　〔2:3〕
その他　〔1:3〕



76・81・85・92　〔1:4〕
その他　〔1:3〕



76・81・85・92　〔1:4〕
その他　〔1:3〕

1

1

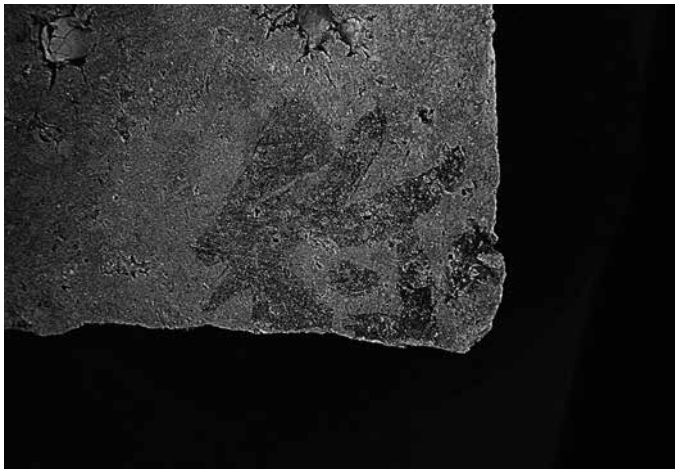
32

40

40

40

72


71

報 告 書 抄 録

ふりがな	みちばたいせき　よん
書名	道端遺跡Ⅳ
副書名	一般国道113号荒川道路関係発掘調査報告書
巻次	Ⅰ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第145集
編著者名	渡邊裕之・辻範朗
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956-0845　新潟県新潟市金津93番地1　　TEL 0250（25）3981
発行年月日	西暦2005（平成17）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
道端遺跡Ⅳ（みちばたいせきよん）	新潟県岩船郡荒川町大字南新保字蟹田地内（にいがたけんいわふねぐんあらかわまちおおあざみなみしんぼあざかにたちない）	15-582	75	38度 06分 59秒	139度 24分 52秒	20050720 ～20050928	3,450	国道113号荒川道路建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
道端遺跡Ⅳ	散布地	縄文晩期	遺物集中ブロック1・土坑1	大洞B1式・石器	短期間の活動痕跡。特定作業場か？
		古墳前期	溝3	土師器	
		平安時代（8世紀末）	川跡	須恵器・砂底土器・墨書土器	

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第145集

一般国道113号荒川道路関係発掘調査報告書Ⅰ

道　端　遺　跡　Ⅳ

平成17年3月30日印刷
平成17年3月31日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市新光町4番地1
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟市金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　北越印刷株式会社
〒940-0034 新潟県長岡市福住1丁目6番27号
電話　0258（33）0306